

2010 年度

関西福祉科学大学大学院

社会福祉学研究科

心理臨床専攻

修士論文題目

小二児童の母親の子育て内省の変化  
—子育ての語り及ぼす影響について—

指導教員（谷向 みつえ先生）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 20961001 氏名 阿古 曉子

# 目 次

はじめに	1
<b>第 I 章 序 論</b>	<b>3</b>
第 1 節 子育て支援と親の内省	3
1、子育て支援の援助の在り方と親の内省	3
2、子育てにおける省察について	3
第 2 節 親子関係の現状とコミュニケーションの在り方	5
1、「子育ての語り」と親子のコミュニケーションの在り方について	5
2、学童期の親の子育ての状況と不安	7
第 3 節 子育ての不安と親の在り方	9
1、子育てに関するについての研究	9
2、子育て支援と内省の在り方の研究の目標	10
<b>第 II 章 方 法</b>	<b>11</b>
第 1 節 調査について	11
1、調査対象	11
2、調査方法	11
3、質問紙の内容	11
3-1 母親に対する 1 回目の質問紙の内容	11
3-2 母親に対する 2 回目の質問紙の内容	12
<b>第 III 章 結 果 と 考 察</b>	<b>13</b>
第 1 節 質問紙の実施・回収状況	13
第 2 節 子育てに関する省察尺度について	13
1、子育てに関する省察尺度の因子分析	13
1-1 親に関する省察尺度の因子分析	14
1-2 子どもに関する省察尺度の因子分析	15
1-3 他者をとおした省察の因子分析	16
2、子育てに関する省察の尺度内相関	17
3、子育てに関する省察の t 検定	18

第3節	親子間の信頼に関する尺度	19
1、	親子間の信頼に関する尺度の因子分析	19
2、	親子間の信頼に関する尺度内相関	20
3、	親子間の信頼に関する尺度のt検定	20
第4節	子育ての語りの効果について	21
1、	子育ての語りの効果の因子分析	21
2、	子育ての語りの効果の尺度内相関	22
第5節	子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度 、親子の信頼感に関する尺度の尺度間の関連	23
1、	1回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、 親子の信頼感に関する尺度の相関	23
2、	2回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、 親子の信頼感に関する尺度の相関	24
3、	1回目と2回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、 親子の信頼感に関する尺度の相関の比較	25
4、	親子の信頼感に関する尺度と子育ての語りの効果との相関	25
第6節	子育ての語りの効果	26
1、	子育ての自己評価による高群と低群の分類	26
2、	子育ての自己評価の低群・高群によるt検定の比較	26
3、	子育ての自己評価の低群・高群による相関の比較	27
1-1	子育ての自己評価の低群の相関	27
1-2	子育ての自己評価の高群の相関	29
1-3	低群と高群の相関の比較について	29
4、	語りの効果と子育てに関する省察の重回帰分析	30
5、	感想の記述	32
第IV章	考察と課題	34
第1節	子育ての語りによる内省の変化	33
1、	子育ての語りと子育てに関する省察の変化	33
2、	子育てに関する省察と親子間の信頼	34
3、	語りの効果と子育てに関する省察	35
第2節	子育てに対する自己評価と子育てに関する省察	36
1、	子育てに対する自己評価の高さの違いと 子育てに関する省察の変化	36
2、	子育てに対する自己評価の高さによる相関の比較	36

3、子育ての語りの効果と子育てに関する省察-----	37
第2節 総合的な考察と問題点 -----	38
1、 総合的な考察-----	38
2、 問題点とこれから-----	39
参考文献 -----	40

## はじめに

日本の少子高齢化の現象は、1990年の「1.57ショック」と呼ばれる合計特殊出生率の急激な低下以降も、留まることなく2008年には、合計特殊出生率1.37と低下を続けている。

少子高齢化の背景としては、日本の社会における子どもと家族をめぐる状況の深刻化がある。現在では、子育てを担う家族の状況は変容し、問題が次の問題を生み出しているような状況にある。

母親の就労の意欲の高まりと増加、母親の子育て負担感の増大から家庭での子育てにかかる時間や意識にも変化が起こってきている。このような、家庭の教育力の低下は、子どもの育ちにも大きな影響を与えている。

こうした状況下では、子育て支援の重要性が高まり、1990年以降様々な施策が作られてきた。1990年政府は、子どもを産み育てやすい環境づくりに向けて話し合いを初め、1994年12月「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）をまとめた。子育てを夫婦や家族だけの問題として捉えるのではなく、国や自治体をはじめ、企業や地域社会も含めた「社会全体で子育てを支援して行くこと」を初めて提起した。そして「子育ての社会化」「子育ての公共性」を政府が認め、「子育て支援」という用語も施策に初出した。1995年エンゼルプランに基づき「緊急保育対策5ヵ年事業」が策定され、育児と仕事の両立に重点を置き、保育所の増設、乳児保育や延長保育の計画、「地域子ども支援センター」の整備が予算化された。1999年12月には「少子化対策推進基本方針」に基づき、「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」（新エンゼルプラン）を策定した。2001年文部科学省も、「幼児教育振興プログラム」により幼稚園が地域の幼児教育センターとしての役割を持つように提言し、2002年9月「少子化対策プラスワン」を政府が発表し、「すべての家庭への支援」を盛り込み「地域における子育て支援」を提言した。2004年6月に少子化社会対策大綱（案）が検討され、同年12月には、「子ども・子育て応援プラン」（新新エンゼルプラン）として具体案が出されるなど、新しい施策も動き始めた。（内閣府「少子化対策」）

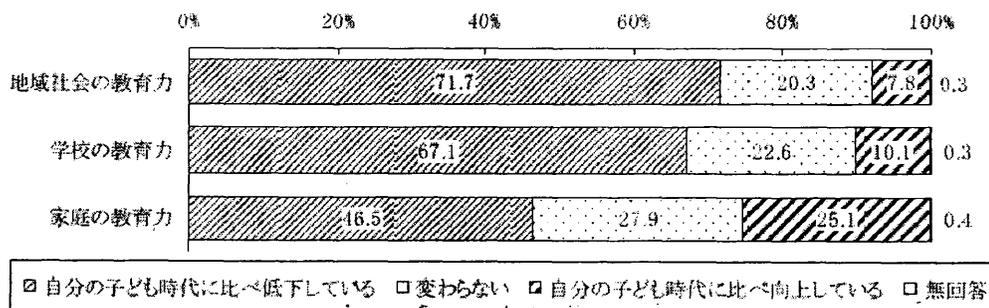
このように子育て支援は、政府の施策や事業によって進められてきたが、子育て支援の機能として必要なものは何なのだろうか。畑山（2009）は、①親が行う子育てを支援する②親の育ちを支援する③子どもの育ちを支援するの3点を取り上げ、②親の育ちを支援するは、親の子育ての力を高めるための支援であり、主に親の心の支援を意図した活動として行われていくべきであるとしている。しかし、学校教育をはなれた「親教育」の実施はなかなか難しく効果をあげるための工夫と努力はひとつの課題であると述べている。

子育て支援のための親教育を考える時、地域社会との関わりの希薄さが大きな壁となり、必要な時に必要な支援が届かない現状がある。

小学生の母親を対象に実施した第一生命経済研究所（2008）のアンケート調査によると、自分の子ども時代と比較して、地域社会の教育力（子どもに対する教育的働きかけ）が「低下している」と回答した母親は、70%を越えた。ま

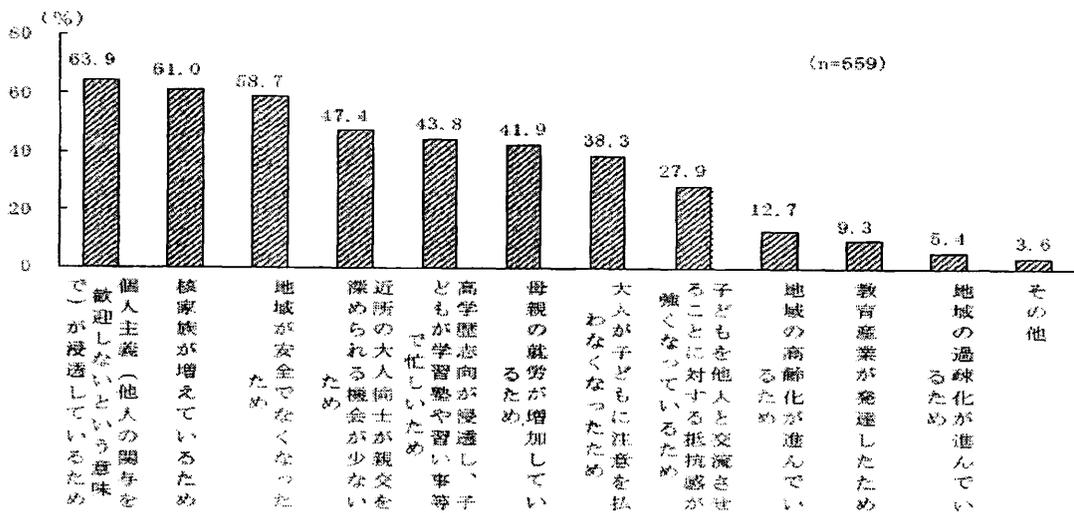
た、その理由として、「個人主義（他人の関与を歓迎しないという意味）の浸透」を63.9%があげている。このように、地域社会からの支援を個人主義を優先するがゆえに、受け入れにくい現状が浮き彫りとなった。

図表1 教育力についての親の子ども時代と現在との比較



注：当研究所生活調査モニターより、全国の小学生の子どもをもつ保護者800名を無作為抽出し、2007年11月にアンケート調査を実施した。有効回収数は780名である。  
資料：第一生命経済研究所「小学生の放課後生活と教育に関するアンケート調査」2007年

図表2 地域社会の教育力の低下の理由＜複数回答＞



注：対象は図表1で、地域社会の教育力が「自分の子ども時代に比べ低下している」と回答した人。  
資料：図表1に同じ。

「すべての家庭への支援」「地域における子育て支援」を提言した「少子化対策プラスワン」の提言は、現状とはかけ離れたものとなっている。①親が行う子育てを支援する、②親の育ちを支援する、③子どもの育ちを支援するの3つの機能を実現するためにはどのような工夫が必要なのだろうか。

個人主義の浸透により、子育てを個人の営みであると考えるとき、人間として本来もっている内省力に子育ての機能を補う力が存在すると考えられる。そこで、子育てを親自身が内省することを促すことと、親の子育てのサポートと関連に着目した。

親自身が子育てをする中で、見たことや聞いたこと、経験したことや考えたことから自分の子育てを考え直したり、子どもとの関係や子育てに関する他者

からの情報をうまく受け止めることが出来るのではないかと考え親自身による子育ての語りに注目した。

本研究では、子どもとの関係、子どもとの会話や子どもへの語りの場面が、母親の内省にどのように作用し、変化して行くのかを小学校の教育課程の中でおこなわれている生活科の教材をとおして調べていきたいと考える。

## 第 I 章 序 論

### 第 1 節 子育て支援と親の内省

#### 1、子育て支援の援助の在り方と親の内省

少子化高齢化の社会情勢の中で、個別化、個人化する社会で子育てを孤独な活動としないように施策が行われてきた。しかし、子育てに対する援助は親のニーズに応える一方向の支援が多く、親が親として自らの力を引き出しつつ親が育っていく視点は置き去りにされてきた。大日向・荘厳(2005)は、親が子育ての知識と態度を学び、子どもとともにある暮らしに喜びが見いだせるような支援が求められているとし、日常的な、親の子育て支援がこれからの視点として重要であるとした。

そのためには、特別な場所に出かけて学ぶのではなく、特別に希望して講座で学ぶのでもない、親が本来持っている内省の力を利用して日常的に親としての力を高めていくことが自然な子育て支援につながるのではないかと考える。

本研究は、母親・家族の子どもへの子育ての語りを通して母親の内省がどのように変化するのか、また、その時の母親と子どもとの関係の上にある母親の子育ての語りによる変化を調べ、親が前向きに子育てに向き合うことができるような支援を考える糸口にしたいと考えている。

#### 2、子育てにおける省察について

内省を調べてみると、心理学辞典(中島・安藤他, 1999)では、内観と同義と記されている。そして、内観とは「自分自身の意識・経験の過程を心理学の直接のデータと見なし、それを観察すること。内省とも言う。」と記されている。

また内省については、古くから内観法の心理療法の観点からその有効性は実証されてきた。しかしその認知的な研究少なく、今後進めていくべき課題でもある。

Schon,D.A(1983/2001)は、職業的専門家の「行為の中の知」、「行為の中の省察」「実践の中の省察」などの言葉を用いて省察について述べている。

「行為の中の知」については、「私たちは行為の前に考えることもあるけれども、熟練した実践を無意識のうちに行うほとんどの場合、先行する知的操作から生まれないある種の知の存在を示すこともある。」また、「行為の中の省察」については、「行為の中の省察の大半が、驚きの経験とつながっている。直観的で無意識的な行為は、予想した結果以上のものを生み出していない時には、とくにそれについて考えようとはしていない。しかし、直観的な行為が驚きや喜び、希望や思いがけないことへと導くとき、私たちは行為の中で省察することによ

ってそれに応える。」としている。

このような省察過程については、観察・報告を中心として行われてきた。こうした実践する中で観察し、内省する過程の研究として、宮内（1998）は、保育者の視点から、保育者の意識の変化を省察過程として研究している。その中で、保育者が瞬時に感じたもの、保育後に一日を振り返った中で感じたもの、一連の流れの捉えなおしの過程で感じ取ったものとは、保育者自身の意識の中で変化が見られたとした。省察過程で、子どもの行為の意味をとらえることは、自分自身の保育を見つめること＝実践を問い直すことであり、自分自身の保育の在り方に関連性をもたせ新たな課題を見つけることができるとした。

また、親の子育てに関する認知過程をまとめ、議論が行われてきた。Reflection は、日本語訳で省察あるいは内省と訳されている。吉村・吉岡・尾形・田代（1996）は、Reflection について保育者が過去の実践場面を想起し実践を様々な形および角度で検討することをおこない、そうした保育者の思考・行為および内容のすべてを包含したものを Reflection であるとしている。朴・杉村（2006）は、これまで保育や親に関する先行研究で省察と言う用語がすでに使われていることや今後、自己改善という親の育ち支援の現場での分かりやすさを念頭に入れ、従来のメタ認知やメタ認知的モニタリング、内省的注意力などと呼ばれてきたものを省察という概念で統一して記述することとした。そして、省察の概念を定義することによって、育児支援の現場が求めている親の内面からの成長に役立てるよう、省察過程を具体的に示すことが可能になるであろうとしている。

また、朴・杉村（2006）は、省察の3層モデルを提案し子育ての認知過程における用語や概念を整理した。第一は、省察の認知のレベルと省察が及ぶ時間の範囲についてである。吉村・吉岡・尾形・田代（1996）の研究では、時間の経過と共に思考がより抽象化・一般化されていくとされている。しかし、子育てにおける省察研究ではこのような点が十分考慮されていない。そこで、朴・杉村（2006）では、子どもと向き合っている場面での気づきと呼べるような省察を1次的省察、比較的短期間（当日や翌日など）にかけて分析・評価する省察を2次的省察、より長い間蓄積され価値観が変わるような深い省察を3次的省察と呼び、省察のレベルを区別しようとした。朴・杉村（2009）の研究の結果として、低次の省察は高次の省察に影響を及ぼし、全体的に子どもに関する省察から親自身に関する省察、他人をとおした省察へ影響が見られるという結果を得た。また、一般的に省察を行う親は肯定的な母性意識を持ち、親子関係が良好で、望ましい養育態度をとると予想されるが、実際に、親の省察の各要素との間にどのような関係があるかについても検討している。この研究の中で、省察をよく行っている親は、自己が持っている問題と理想的な親としての自己との矛盾に気がつきやすく、そのことに悩みやすいネガティブな側面と、現実的な状況と照合しながら前向きに対処していくポジティブな側面の両方を持っている点が考えられるとしている。また、他者を通じた省察では、子育てに関する情報を得たり、子育てにおける問題を他者を通して解決を模索するポジテ

ィブな面と、自分の子ども以上に他者の子どもの発育や他者の子育てに注目することで子育てが負担に感じられたり自分は母親としては不適格なのではないかと思うネガティブな面も含まれていることを示す結果を得た。また、理想的な子育てにおいては、育児書や雑誌から情報を得たり、直接他の親子の行為を目にして、会話を聞くことによって、自分の育児に生かすことがある。そして、子どもを育てている親同士の交流を通して、子育てに関する有用な情報を交換したり、子育ておける様々な問題を模索することもあると述べている。このような外的な情報や、他者との交流など他者をとおした省察は、子どもとの相互作用だけに注意を払い孤立してしまいがちな現代の親において特に重要であり、親の省察に欠かせない要素であるとした。

鹿子木・森口（2009）によって、就学以降の自己意識の発達について、子どもが自身の心的な活動に気づくことができる能力（内省能力）の発達を検証した探索的研究がなされた。就学後の子どもは、自分に対する他者の考え（二次的信念）を理解することによって、自身の心的状態に対する洞察が促される。こうして、内省能力と二次的信念は発達の関連するとした。この発達の内省の検証は、子育ての省察を考える上で人の内省を認知する過程で大切な知見であると考えられる。

## 第2節 親子関係の現状とコミュニケーションの在り方

### 1、「子育ての語り」と親子のコミュニケーションの在り方

「子育ての語り」は、小学校2年生の生活科の単元、「みんな大すき」で行われる授業に付随して行われる学習活動である。

学習指導要領解説生活編（2008）によると、文部科学省では、平成20年1月の中央教育審議会においての答申を踏まえ生活科では、①教育基本法等で明確となった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること、②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等のバランスを重視すること、③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心と健やかな体を育成すること、を基本的なねらいとしている。生活科の教科目標を、「具体的な活動や体験をとおして、自分と身近な人々、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程においても生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立の基礎を養う。」とした。そうした目標の上に、生活科教師用指導書（2005）では、小学校2年生の生活科の単元、「みんな大すき」の単元の目標は、「自分の成長には家族をはじめ多くの人がかかわり、いろいろな人に世話になってきたことに気づくと同時に、成長によっていろいろなことが来るようになった自分に自信を持ち、これからの生活に意欲を持つことが出来る。」と記され、単元構成は「大きくなったわたしたち」「今のわたし これからのわたし」の二つの小単元から構成されている。「子育ての語り」は、「大きくなったわたしたち」の中で「自分が出来るようになったことの気づき」をベースに「自分の成長に気づかせ、自分の成長について調べる意欲を持たせ」、この意欲を、「具体的には、自分が他者からどのように思われているのか、さらに、小さい頃はどうかだったのか調べる活動を行う」

に結びつけていく学習活動につながっている。

本研究においては、この「小さい頃どうだったのかを調べる活動」に焦点を当て、担任から出された家庭学習課題のなかで、母親や家族に「子育ての語り」を行ってもらうことにした。

今回の子育ての情報の伝達が話し手と聞き手の相互作用によって成り立つことを考慮すれば、ここでは聞き手の要因を抜きにして考えることはできない。本研究では、聞き手は小学生2年生の子どもであり、話し手は母親および家族である。話し手である母親および家族の語りの内容が聞き手である子どもにどのように伝わっているのか、その表情や言動に注目しながら反応を見ながら話していく場面が存在する。そこで、親子のコミュニケーションについての研究について列記する。

親子のコミュニケーションに関する研究として、眞榮城・菅原・酒井・川島（2008）では、母親が子どもに相談し、子どもから援助してもらう場面において、女子から母親への肯定的な援助と児童期における女子の自己価値観との間に有意な正の相関が認められたとし、母親が子どもに悩み事を相談する場面では、子どもが援助者・母親が被援助者となることを示唆している。

また、親子のコミュニケーションと子どもの感情の発達について大河原（2004）によって、青年期になってから「きれる」子ども達を予防していくためには、小学校時代の親子のコミュニケーションの在り方が育ちと大きく関係していることが示された。

親子の関係性の構築に関するプロセスについて、佐藤（2004）は、会話の楽しさにつながる話題選びや、絆の構築を促進するような親の態度、そして、親子の温かい接触を確保するための緩やかな家族ルール等への提案がぜひとも必要になってくるとした。

また吉武（1995）は、親との会話を通じたコミュニケーションの程度と、共感性の高さとの関連について、本の読み聞かせや会話の影響というものが、年数がたつにつれその影響が徐々に出てくるとした。また、共感性の高い親が実際の日常生活の中でも、共感性を強化する相互作用を行っているとした。

また、ナラティブの臨床場面で、森・福島（2007）は、自己物語論の観点から、自己とは自己物語をとおして社会的に構成されるものであり、他者との関係性の中で自己内省が生じ、機能不全に陥った物語を再構成し、より適応的なものへと再著述する場であると言いかえることができるとした。そして、自己内省とは、「内在化した他者」の声や、「もう一人の自己」の声を含む異なる声を受け入れることであり、多様なものの見方が可能になり、新たな選択肢が見出せるようになることであるとした。自己は、他者との対話をとおして明確化され、適応は、客観的な評価に基づくというよりは、むしろ主観的な評価としての個人の意味づけや解釈に依拠しているとした。

こうした、研究により、今回の子育ての語りでは、子どもが聞き手となる力を持つこと、また、親子のコミュニケーションの在り方は、今後の子どもの成長と大きく関わっていることが示唆され、語りは内省に結び付くことが説明さ

れた。

## 2、学童期の親の子育ての状況と不安

学童期の親の子育てに関する関心は幼児期の子育ての不安とは、違った側面を持っている。神田・山本（2007）によりまとめられた、2001年（1歳半、3歳）から2007年（小学1年、3年）までの継続調査協力者710人の縦断的研究によりと、学童期の生活における親の子育て不安についての調査がされている。結果を示しながら、学童期の子育ての不安と親子関係の現状についてまとめる。

表1 子育て不安因子分析結果（主因子法 プロマックス回転）（神田・山本, 2007）

	学年	N	平均値	標準偏差	1年3年有意差	
子育て不安	子育ての満足感のなさ	小学1年	279	12.85	3.00	n.s.
		小学3年	290	12.78	2.77	
	子育て・子への不安	小学1年	283	9.71	2.68	n.s.
		小学3年	293	9.83	2.73	
	子どもへの否定的感情	小学1年	282	7.05	1.70	n.s.
		小学3年	293	6.87	1.78	
学校関連不安	心身の疲れ	小学1年	283	4.61	1.40	n.s.
		小学3年	294	4.65	1.42	
	学校友達関係の不安	小学1年	281	6.98	2.48	n.s.
		小学3年	291	6.67	2.80	
	教師・学習・学校行事への不安	小学1年	280	7.36	2.52	n.s.
		小学3年	292	7.46	2.45	

表1に示す通り、小学1年生の時と3年生での子育ての不安に有意差はなく、ほとんど変わらない。学童期の親の子育ての不安は、1年生と3年生は変わることがなく、親の子育ての不安と子どもの学校生活の不安が存在する。今回の質問紙では、子育て不安に関する質問となるため、学校生活に関する不安については問うことがないが、潜在的に親の意識の中には子どもの学校場面で起こる不安も存在する。

表2 心配事があったとき誰かに相談したか 人(%)

	はい	いいえ	1年と3年有意差
小学1年	179(77.3)	58(22.7)	*
小学3年	183(69.3)	81(30.7)	

\*: < .05

表3 心配事があっても相談しなかった理由 人(%)

	相談するほどでもない	相談することがはばかれた	相談しても解決しなかったと思った	その他	1年と3年有意差
小学1年	38(71.7)	1(1.9)	8(15.1)	6(11.3)	n.s.
小学3年	51(76.1)	1(1.5)	12(17.9)	3(4.5)	

親に「心配事があった時に誰かに相談したか」表2では、心配事があった時に相談することについて、1年生と3年生では、5%水準で有意差が出ている。1年生に比べ3年生では相談しない人の割合が増えている。問題が軽減したのか、問題が少なくなったのかは明らかではないが、表3では、「心配事があっても相談しなかった理由」として、「相談するほどでもない」が増加傾向にある。

子育てにおける心配事が1年生の子どもより3年生の子どもに対するほうが、子どもが大きくなり、できることも増えたことから相談することが少なかったのではないかと考えられる。また、子どもの成長とともにできることが増えたり、多くのことが理解できるようになると子育てに関する不安は軽減している。相

談は減っているが、不安は変わらないことから、親が自分自身の中で問題を解決しようとする傾向がうかがえる。

	ほとんど毎日	ときどき	教えていない	1年と3年有意差
小学1年	116(44.1)	152(53.9)	14(5.0)	***
小学3年	43(14.6)	223(75.9)	28(9.5)	

\*\*\*: <.001

	楽しい	負担	他	1年と3年有意差
小学1年	116(44.1)	73(28.1)	74(28.1)	n.s.
小学3年	92(36.1)	88(34.5)	75(29.4)	

次に家庭学習についての状況を見ていく。表4では、家庭学習についての質問で「家で宿題や勉強を教えている」について聞いている。1年生でも3年生でも、「ときどき」教えている割合が1番多いが、1年では「ほとんど毎日」が44.1%であるのに対して、3年では14.6%になりほぼ1/3になり、0.1%水準で有意に減少している。1年生の間は学習習慣を身につける時期であることから、親としても子どもに付き添い学習を教えることが多いが、学習することに慣れ、習慣が身についてくる3年生になると、親として勉強を教える機会は減ってくる。表5では、学習を教える場面でその活動をどう思っているのかについて聞いている。「楽しい」と感じる親は、1年生に比べ3年生は有意差はないが減少傾向にある。1年生に比べ3年生になると親が勉強を教えることが「楽しい」ことから「負担」になっている。子ども自身にできることが増え親の学習への関与は必要性が低くなり、それとともに親にも負担と考えている。

親は、子どもが1年生になり学校に行くようになったことで成長したと考えているだろうか。表6では、成長したと考える人の割合は3年生になってもほとんど変化していない。

	はい	どちらともいえない	いいえ	1年と3年有意差
小学1年	254(90.1)	26(9.9)	0(0.0)	n.s.
小学3年	268(90.8)	27(9.2)	0(0.0)	

親は、学校へ行くことが子どもの成長につながっていることを認識している。しかし、表1にある「学校関連の不安」の下位尺度はいずれも平均が1年生に比べ3年生はやや上昇している。このデータでは、子どもの成長と学校関連の不安は関係がない。

これらのデータは、1年と3年のデータで、2年生の親の子育て不安と学校、子ども、親の現状ではないが、今回家庭学習の子育ての語りや親の内省にどのように関わるのかを調査研究していくことから、こうした現状の中で行われる子育ての語りであることを理解しておく必要がある。

また、対象となる2年生という学年は、間もなく認知面での変化をむかえる。「9歳の壁」と呼ばれる認知の変化を迎えることは、親にとっても子育ての在り方について変化させていく必要のある時期でもある。こうした時期を前に自分の子育てを振り返り子どもに語ることは、これまでの子育てを振り返りこれからの子育てのために母親が整理するよい機会である。

### 第3節 子育ての不安と親の在り方

#### 1、子育て関するについての研究

子育てについての研究は、母親自身のあり方や、子どもの特質や行動による変化に関する研究、社会の在り方や援助の在り方、親の成長など多岐にわたる問題がある。また、乳幼児期の育児不安と子育て不安は、対象年齢の違いにより表現も実態も違うことが多いと思うが、ここでは同義として扱うことにする。

朴・杉村（2006）は、子どもの思いが親と一致していない時は、親がメタ認知的なモニタリングをとおして適切な育児態度をとることができることが、子どもと安定的な関係を築いていくとした。

親子関係については、竹村・小林（2008）は、親との信頼関係が良好と認知するほど児童の内発調整及び同一化傾向が高いこと。また、親が子への経済的支援を惜しまず、将来について会話するほど児童の自己決定性が高くなり、親が子とともに文化的活動をするほど内発調整は高くなることを見出した。

興石（2002）は、育児において対処不能感を感じ、育児行動におけるネガティブな認知的評価をした時、「私のどこが悪いのだろう」「私はどう努力すればよいのだろう」などと自己について考え込んでしまいやすい状況にあり、自己や状況についてネガティブになりやすい。自己注目傾向の高い母親においては、対処不能感が高まった場合育児不安も高まり、そうでない母親においては、対処不能感の変化が育児不安の変化に結びつかなかった。このことから、自己に注意を向けやすい母親の場合対処不能感の上昇が育児不安の原因であることが検証された。また、武井・寺崎・門田（2006）では、育児不安を予防、低減するためには、子どもの気質特徴に応じた適切な対応を助言していくことが重要であるとした。

橋本（2009）は、多くの母親が子育てのために頑張っているが、かわいい子どもに「イライラする、八つ当たりしたくなる、子どものために我慢ばかりしている」という気持ちを持つのはどの母親も同じである。そういう気持ちを持つことがいけないのではなくて、その気持ちを処理できないのが問題であるとした。

長谷（2007）は、子育てに対する不安は、子育てが避けることのできない日常の営みであるからこそ負担感が大きく、不安も大きいとし、子育てに対する意欲と自己肯定感が母親でいることの安心感、満足感につながると述べている。藤井・永井（2008）は、子育てに不安を感じていない母親は自己効力感が高く、親子関係を良好と考えている人ほど子育てに満足していた。子育てに不安を感じている母親は、人的サポートを得られているほど子育てに満足し、母親役割への葛藤が強いほど子育てに満足を感じていないと述べている。八木・萩原・境（1993）は、母親の子どもに対する生きがい感が母親の自己効力感の中の社交性や援助者との関連で子育てを考えているとした。子どもとの一体感に生きがいを感じている母親は、自分を援助者として適切であると感じ、自分に価値を感じ他人との付き合いに自信を持ち、子どもから受ける援助に生きがいを感じ

じる度合いが強い母親は、自分が他人を援助できていると感じ、子どもの成長だけでなく自分自身の成長や将来的な展望で子どもに関わることに意義を見出している。武井・寺崎・高尾・門田（2008）は、養育者は、育児不安が生起する理由として、認知している育児能力への自信のなさなどを解消することで対処するのではなく、自身の趣味や周囲からのサポートを得ることで解消しやすくことや養育者の対処不能感を低減することで育児行動に対する自己効力感を高める。養育者が選択した育児行動を認めることも重要であると述べている。

では、子どもの自己効力感はどのようなものであるか。石橋・堂野（2006）は、親が子どもを認知している以上に大きな期待をかけている場合に児童の目標が低く、さらに自己効力感についても低いことが明らかにされている。

親としての在り方の研究としては、柏木・若松（1994）が、「親となる」ことによって親の発達は、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生き甲斐など多岐にわたるが、いずれも父親より母親が著しく見られるということや、子ども・育児に対して母親は肯定面と同時に否定的な感情も併せ持つアンヴィバレントなものであると述べている。及川（2005）は、親性の発達は夫婦関係の満足度と子どもを持つことを望んでいることが影響因であるとし、母親の方が親性の発達が早期に起こるとした。親の役割に関して、川井、安藤、武島他（2006）は、子どもにとって母親は「安らぎ、安全、安心、信頼、見守り、愛情で包み、大好きで優しく、かけがえのない、甘えられ、丸ごと包む」という「安全性」に関わる役割に集約されている。

このように、子育てに関する研究は多く、育児不安の視点、親の発達にあり方に関する視点など、親の内省につながる研究が行われている。

## 2、子育て支援と内省の在り方の研究の目標

本研究は、母親・家族による小学2年生の子どもへの子育ての語りを通して母親の内省がどのように変化するか、また、これまでの子育ての自己評価の低い母親の内省の在り方は、これまでの子育ての自己評価の高低による母親の内省の在り方の変化とどのような違いはあるのかについて調べることを課題とする。

親の子育て内省を考えると、そこには親子関係に根差した相互理解の関係が見えてくる。今回は、こうした関係が観察可能な、小学校の生活科の授業で行われる学習活動に親として関わっている様子に注目し研究の対象とした。子どもの家庭での学習に親として積極的に関わることは、親全員が子育てに対する考え方如何に関わらず取り組む課題であり、望む、望まざるに関わらず家庭学習として行うべき課題でもある。母親は、子どものために課題に協力することで、それまでの子育てをふまえた子どもへの対応が子育ての語りの内容に現れ、そうした語りが母親の内省をどのように刺激し、内省はどこに向かうのか。また、親はこの学習課題を子どもと行うことで内省が刺激され子育てに対する考え方に変化を生むのか。こうした点に着目していきたいと考えた。

子育ての語りは、現実的には、これまでの子育ての様子、子どもがどのように大きくなってきたかなど、それぞれの親にとって個々の子育て、個々の考え

の上に立つ百人百様の語りが存在すると考えられるが、親としての立場で子どもに伝えると言う行為は、一様で、その内省は、ある程度の傾向が存在すると考える。また、これまでの研究から、子育てに対する肯定的な考えを持つ親の内省は高いとされている。このことから、子育てに対する自己評価の低い母親にとって子育ての語りはどのように子育ての内省に影響するのかについて検討する。

また、小学2年生は、「9歳の壁」と呼ばれる、発達の節目を前に、母親には今までの子育ての振り返りから、次の発達のステージに変化する子どもについて理解と子どもの接し方を考え直す時期でもある。子どもの認知の変化に合わせて母親の子どもに対する親の認知を変化させていくことが望まれる。しかし、現実には変化に気づくことなく幼いままの親子関係を維持してしまうこともある。今回の調査、研究を通じて、児童期の子どもを持つ母親にある子育てに関する内省の動向を見ながらこれからの親子関係がよりよい方向に進む支援など、学童期の子育て支援の在り方を提言する視点も持って研究を進める。

## 第Ⅱ章 方 法

### 第1節 調査について

#### 1、調査対象

大阪府内の公立小学校に在籍する2年生4クラス105名（男子52名・女子53名）の児童の母親が調査対象となった。

#### 2、調査方法

2009年12月に1回目の質問紙調査を実施した。2回目の質問紙調査は、2010年3月に行った。質問紙は母親に対して、担任の協力を得て2年生の子どもを通して配布し、各家庭で記入し、担任が回収を行った。

2009年12月の1回目の質問紙の回収後、2010年1月より2月末にかけて、各担任は、2年生の生活科の単元である単元名「みんな大すき」の小単元名「大きくなったわたしたち」の学習の中で、家庭学習の課題として、母親もしくは、家族から2年生児童に、成長の様子（子育ての語り）について語る機会が持たれた。母親・家族の具体的な活動内容は、①2年生の大きくなった我が子への手紙を書く②命名由来を伝える③生まれる前、生まれてから2年生までの育ってきた様子、家族の思い等について子どもに語るである。期間は、1月から2月末にかけて担任がクラスの実情に応じて、家庭での学習活動として行った。

その後2010年3月に2回目の質問紙を実施した。質問紙は無記名とした。

なお、この調査に当たっては、2009年11月の保護者会に、趣旨説明を行い個人が特定できない形でデータ化することなどの承諾を得て行った。

#### 3、質問紙の内容

母親に対して、事前・事後と2回実施した。1回目と2回目と同じである項目と、必要な情報を得るために付け加えた項目などがあるので明記する。

##### 3-1 母親用1回目の質問紙の内容

◆ 子育てに関する省察について

朴・杉村（2009）により作成された、「子育てに関する省察」の項目を使用する。この子育てに関する省察は、「親自身に関する省察」、「子どもに関する省察」、「他者をとした省察」で構成されたものである。

「親自身に関する省察」では、「子どもに対する自分の言動や態度の気をつけることがある」、「子どもに何か伝える前に、自分の伝え方について考えることがある」、「親としての信念について考えることがある」などの親の視点から子育てを省察する項目が 10 項目ある。

「子どもに関する省察」では、子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向ける」「子どもと話す前に、子どもの受け止め方について考えることがある。」「子育ての出来事から「子ども」の本質について考えることがある」などの子どもの様子について省察する項目が 11 項目ある。

「他者をとおした省察」では、「他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある」、「他人と子どもの話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある。」、「他人の子どもの言動を注意深く見ることがある。」など、他者を介して子どもについて省察する項目が 11 項目ある。

これらの項目について、5 段階で評定を求めた。

◆ 親子間の信頼感に関する尺度

酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）によって作成された親子の信頼感に関する尺度を使う。「この子はだれよりも私が好きだと思う」「この子はだれよりも私のことを信頼していると思う。」「この子は私と一緒にいて幸せだと思う」など子どもに対する信頼感について問う 8 項目を用いた。これらの項目について、4 段階で評定を求めた。また親子間の信頼に関する尺度に親子のコミュニケーションに関する 4 項目を作成し付け加え、全 12 項目の尺度を作成した。親子のコミュニケーションに関する 4 項目は、ゼミ担当教員、同ゼミ生で相談のうえ作成し、日常的なコミュニケーションの様子について問う項目として付け加えた。

◆ フェイスシートと質問事項について

年齢・子どもの数・子どもとの関係・就業状態・家族数・祖父母との同居、別居について・子どもとの会話の内容・よく話す時間帯・話す時間・話すことの好き嫌い・話を聞くことの好き嫌いを質問紙に加え、被験者の子どもとの関係や会話の様子について把握できるようにした。

3-2 母親用 2 回目の質問紙の内容

◆ 朴・杉村（2009）により作成された、「子育てに関する省察」の項目

◆ 酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）によって作成された親子の信頼感に関する尺度（母親用）

◆ フェイスシート

子育ての語りをした状態に関する質問・話した時間・だれが話したか・話す前の準備

◆ 子育ての語りをした時の様子についての質問

子育ての語りの前、語っている時、語った後の様子や心境を聞く質問内容で、ゼミ担当教員、同ゼミ生、実施校校長、担任などと相談しながら作成した。

親の気持ちや時系列や場面などが異なる内容の項目が 22 問ある。そのうちの「1、語る前に、これまでの子育てはうまくいっていると思っていましたか」「2、語る前に、これまで子育てをがんばってきたことに自信をもっていましたか」の 2 項目についてはこれまでの子育てをどのように考えてきたかの親の子育ての自己評価に関するもので、分析の上で高群、低群に分類する得点基準にするために設定した。そのため語りの効果測定に用いるのは 20 問の項目である。

「改めて子どもの成長を実感した」「語ることで、これまでの子育てに自信が持てましたか」等の項目 20 項目について、4 段階で評定を求めた。これらの項目は、分析の段階で効果測定のために利用するためのものである。

親の質問シートの項目表

	子育てに関する省察	親子信頼感に関する尺度（親用）	フェイスシート	語る時の様子についての質問（語りの効果）
1 回目の質問紙	○	○	○	×
2 回目の質問紙	○	○	○	○

### 第三章 結果と考察

#### 第 1 節 質問紙の実施・回収状況

親用質問紙については、12 月上旬に配布し、各家庭で母親が記入し、クラス担任が回収した。1 回目の回収は、12 月中に行われ 82 名（78.0%）であった。2 回目は、3 月上旬に配布し、母親が記入後、回収は、3 月末までとし、72 名（68.5%）であった。

親用 1 回目と 2 回目データがそろった質問紙は、60 組みであったが、欠損のあるデータを除くと 45 組となり、今回はデータとして 45 名分を使うことにした。

母親の属性については、母親の平均年齢は 36.6 歳、子どもの数の平均は、2.4 人、家族の人数の平均は 4.8 人である。子どもは、男児 20 人（44.4%）、女児 25 人（55.6%）であった。仕事については専業主婦が、23 人（51.1%）、パート、アルバイトは 16 人（35.6%）、フルタイムは、6 人（13.3%）であった。祖父母との同居は 8 人（17.8%）別居は、37 人（82.2%）であった。

#### 第 2 節 子育てに関する省察尺度について

##### 1、子育てに関する省察尺度の因子分析

子育てに関する省察の因子分析を行うに当たり、45 件のデータが、1 回目、

2回目とあることから、因子分析の結果が、1回目データにも2回目のデータにも適合しやすくなるように、2回分のデータを合わせて90件にして因子分析を行った。

また、親に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察は、3つが関連した尺度であるので、因子分析は一貫性を持って行うことが必要と考え、分析方法と回転は同一なるように因子分析を行った。

#### 1-1 親に関する省察尺度の因子分析

親自信に関する省察尺度 10項目に対して、探索的に主因子法で因子分析を行った。固有値が、1.0を超えている因子数は「2」であった。

先行研究(朴・杉村,2009)の因子数を「2」と一致していることから、主因子法、プロマックス因子固定2で因子分析を行った。この方法では、10項目が因子負荷量が.40以上で、親に関する省察の因子抽出がされた。

親に関する省察の因子分析は、主因子法、プロマックス回転、因子固定「2」で行うと、第1因子1, 2, 5, 6, 8と第2因子4, 3, 10, 7, 9となり、先行研究の因子分析結果の、第1因子10, 4, 7, 6, 9, 3と第2因子2, 1, 8, 5の2因子とは違う結果になった。第1因子と第2因子の項目が入れ替わり、「6、子どもが何か言った後、その時の自分の感情について考えることがある」の項目が移動している。

調査対象が、先行研究では3歳から5歳を対象としており親の子育てに関する省察であり、子育ての語りについての変化を考えると項目の移動は容認すべきであると考えた。

Cronbachの $\alpha$ 係数は、第1因子より、.84、.86となり.70以上であり内的整合性があると考えられる。その結果は、Table 1に示す通りである。

第1因子には、「1、子どもに対する自分の言動や態度の気をつけることがある」、「2、子どもに何か伝える前に、自分の伝え方について考えることがある」、「5、子どもに何か言う前に、自分の言動の影響を考えることがある」、「6、子どもが何か行った後、その時の自分の感情について考えることがある」、「8、子どもと話すとき、自分の言動や態度を意識することがある」、があり、コミュニケーション場面での態度や言動についての項目が多い。そこで、「コミュニケーション場面での対応」と命名した。

第2因子には、「4、親としての自分の長所・短所を考えることがある」、「3、親としての信念について考えることがある」、「10、子育ての方針を振り返り改善すべきところを考える」、「7、「子どもを育てる」ことはどういうことか考えることがある」、「9、子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある」などあり、親としてどうあるべきかということを考える項目であることから「親としての在り方」と命名した。

本研究では因子項目の内容から「親自身に関する省察」の下位尺度では、「コミュニケーション場面での対応」は、対場面的な尺度であり、「親としての在り方」は、内省的な尺度であると考え検討していく。

Table 1 親自身に関する省察の因子分析結果(主因子法、プロマックス回転) N=90

項 目	因子負荷量	
	I	II
<b>第1因子「コミュニケーション場面での対応」(<math>\alpha = .84</math>)</b>		
1 子どもに対する自分の言動に気をつけることがある	.98	-.33
2 子どもに何か伝える前に、自分の伝え方について考えることがある	.81	-.01
5 子どもに何か伝える前に、自分の言動の影響について考えることがある	.78	.05
6 子どもが何か言ったあと、その時の自分の感情について考えることがある	.64	.17
8 子どもと話す時、自分の言動や態度を意識することがある	.64	.28
<b>第2因子「親としての在り方」(<math>\alpha = .85</math>)</b>		
4 親としての自分の長所・短所を考えることがある	-.24	.91
3 親として信念について考えることがある	-.08	.86
10 自分の子育ての方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	.12	.71
7 「子どもを育てる」はどういうことが考えられることがある	.19	.69
9 子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	.42	.45

### 1-2 子どもに関する省察尺度の因子分析

子どもに関する省察尺度 11 項目に対して、探索的に主因子法で因子分析を行った。固有値が 1.0 を超えていることから因子数は「2」であることが確認されたが、先行研究(朴・杉村, 2009)では因子数は、「3」で因子分析を行っていることから、主因子法、プロマックス回転で因子数を「3」に固定して因子分析を行った。結果は、どの項目も因子負荷量が .40 以上であることから、因子数が「3」で因子分析ができた。どの項目も因子負荷量が .40 で子どもに関する省察の因子抽出がされた。

先行研究と比較すると、第1因子 8, 7, 5, 6 と第2因子 2, 3, 10 となり第3因子は、4, 1, 9, 11 となり、先行研究の因子分析結果の、第1因子 6, 5, 8, 11, 9 と第2因子 1, 7, 4 と第3因子 10, 2, 3 となり結果とは違う結果になった。本研究の第2因子と先行研究の第3因子は同じようであるが、本研究の第1因子と第3因子と先行研究の第1因子と第3因子は入れ替わりが多い。対象年齢の違いと子育ての語りによる変化ではないかと考える。

そこで、主因子法、プロマックス回転、因子固定 3 として因子分析を行った。結果は、因子負荷は、どの項目も .40 以上であるので削除項目はない。Cronbach の  $\alpha$  係数は、第1因子より、.87、.86、.78 となり .70 以上であり内的整合性があると考えられる。その結果を Table 2 に示した。

第1因子は「8、子どものふだんの行動から、子どもの長所短所を考えることがある」「7、子どもと話しているとき、子どもの表情や態度の注意することがある」「5、子どもに関する長期的見通しについて考えることがある」「6、子どもがどう変わってきたか考えることがある」の項目から親が子どもの観察からそれぞれの子どもの特性を捉えようとしていることから、「子どもの特性」と命名した。

第2因子は、「2、子どもと話す前に、子どもの受け止め方について考えることがある。」「3、子育ての出来事から「子ども」の本質について考えることが

ある」「10、子どもと話した後、子どもがどのように受け止めたか考えることがある」の3項目から、親が子どもの受け止め方について考える項目なので、「子どもの受け止め方」と命名した。

Table2 子どもに関する省察の因子分析結果(主因子法 プロマックス回転) N=90

項目	因子負荷量		
	I	II	III
<b>第1因子「子どもの特性」 (α=.87)</b>			
8 子どものふたんの行動から、子どもの長所短所を考えることができる	.95	-.08	-.10
7 子どもと話している時、子どもの表情や態度に注意することがある	.75	.15	-.08
5 子どもに関する長期的な見通しについて考えることがある	.60	.01	.21
6 子どもがどう変わってきたか考えることがある	.55	.13	.13
<b>第2因子「子どもの受け止め方」 (α=.86)</b>			
2 子どもと話す前に、子どもの受け止め方について考えることがある	-.12	.85	.16
3 子育ての出来事から子どもの本質について考えることがある	.03	.80	-.05
10 子どもと話した後、子どもがどのように受け止めたか考えることがある。	.26	.69	-.12
<b>第3因子「子どもの言動への関心」 (α=.78)</b>			
4 子どもの言動に気をつけている	-.13	-.06	.78
1 子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向けることがある	.01	.12	.57
9 子どもにとって、将来何が必要か考えながら育てている	.23	.02	.51
11 子どものこれからの成長について考えることができる	.38	-.01	.45

第3因子「4、子どもの言動に気をつけている」「1、子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向ける」「9、子どもにとって何が必要か考えながら育てている」「11、子どものこれからの成長について考えることがある」など子どもの言動や行動に関心を持つ項目がある。そこで、「子どもの言動への関心」と命名した。

本研究では因子項目の内容から「子どもに関する省察」の下位尺度では、「子どもの言動への関心」は、対場面的な尺度であり、「子どもの特性」、「子どもの受け止め方」は、内省的な尺度であると考え検討していく。

### 1-3 他者をとおした省察の因子分析

他者をとおした省察11項目に対して、探索的に主因子法で因子分析を行った。固有値が、1.0を超えている因子が「2」であることから、因子数を「2」として因子分析を進めた。

先行研究(朴・杉村,2009)でも、因子数は「2」とされていたことから、主因子法、プロマックス回転で因子数を「2」に固定して因子分析を行った。結果は、どの項目も因子負荷量が.40以上で2因子が抽出された。あった。

他者をとおした省察11項目の因子分析を、主因子法、プロマックス回転、因子固定「2」で行うと、第1因子は、8, 7, 10, 9, 4となり、第2因子は、6, 5, 3, 11, 1, 2となった。先行研究と比べると、第1因子と第2因子の逆転はあるが項目の変化はない。Cronbachのα係数は、第1因子より、.89、.87となり.70以上であり内的整合性があると考えられる。結果はTable3に示す。

第1因子には、「8、他の人の育て方を見て、今の自分の子育てに必要なことに気づくことがある」「7、他の人と子育ての話をして、自分の子育ての方針を改めることがある」「10、いろいろな話を聞いて、自分の子ども観を見直すことがある」「9、他の子どもたちと話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある」「4、他の人と話しているうちに、子育てに関する疑問が解決することがある」など他者から得る情報を自分の子育てに役立てようとしている項目が多いことから、「子育ての他者からの影響」と命名した。

第2因子には、「6、他の子どもが親と話す様子に注意を向けることがある」「5、他の親の子どもに対する話し方に注意することがある」「3、他人の子どもの言動を注意深く見ることがある。」「11、他の子どもが親とかかわる様子を注意深く見ることがある」「1、他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある」、「2、他人と子どもの話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある。」、他者に対して注意を向ける項目が多いことから、「他者の対応の観察」と命名した。

Table 3 他者を通じた省察の因子分析結果

(主因子法 プロマックス回転) N=90

項目	因子負荷量	
	I	II
<b>第1因子「子育ての他者からの影響」</b> $\alpha = .89$		
8 他の人の育て方を見て、今の自分の子育てに必要なことに気づく事がある	.95	-.07
7 他の人と子育ての話をして、自分の子育ての方針を改めることがある	.93	-.11
10 いろいろな話を聞いて、自分の子ども観を見直すことがある	.83	-.01
9 他の子ども達と話をすることで、自分の子どもの特徴に気づく事がある	.73	.01
4 他の人と話しているうちに子育てに関する疑問が解決することがある。	.44	.21
<b>第2因子「他者の対応の観察」</b> $\alpha = .87$		
6 他の子どもが親と話す様子に注意を向けることがある	-.09	.92
5 他の親の子どもに対する話し方に注意することがある	-.14	.74
3 他人の子どもの言動を注意深くみることがある。	-.03	.65
11 他の子どもが親とかかわる様子を注意深く見ることがある	.19	.62
1 他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	.34	.58
2 他人の子どもの話をすることで、自分の子どもの特徴に気づく事がある	.31	.48

本研究では因子項目の内容から「他者をとおした省察」の下位尺度では、「他者の対応の観察」は、対場面的な尺度であり、「子育ての他者からの影響」は、内省的な尺度であると考え検討していく。

## 2、子育てに関する省察の尺度内相関

子育ての省察の下位尺度間の相関係数を Table 4 に示す。

1 回目の質問紙 (n = 45) についての因子間相関について結果をまとめた。同じ尺度内相関では、親自身に関する省察、子どもに関する省察、他者に対する省察のいずれの下位尺度間でも、強い相関が見られた。

対場面的な尺度間の相関では、「コミュニケーション場面での対応」と「子どもの言動への関心」、「他者の対応の観察」では、いずれも強い相関があった。

内省的な尺度間の相関は、「親としての在り方」と「子どもの特性」では比較的強い相関が見られ、「子どもの受け止め方」では、強い相関が見られた。また、「親としての在り方」「子どもの特性」「子どもの受け止め方」と、「子育ての他

者からの影響」で強い相関が見られた。内省的な尺度間の相関は、強い相関が多い。しかし、「親としての在り方」「子どもの特性」などでは比較的強い

Table 4 子育てに関する省察尺度の相関関係

	コミュニケーション場面での対応	親としての在り方	子どもの特性	子どもの受け止め方	子どもの言動への関心	子育ての他者からの影響	他者の対応の観察
親としての在り方	.61 <sup>**</sup> .70 <sup>**</sup>						
子どもの特性	.67 <sup>**</sup> .77 <sup>**</sup>	.37 <sup>*</sup> .45 <sup>**</sup>					
子どもの受け止め方	.57 <sup>**</sup> .62 <sup>**</sup>	.54 <sup>**</sup> .47 <sup>**</sup>	.64 <sup>**</sup> .77 <sup>**</sup>				
子どもの言動への関心	.59 <sup>**</sup> .59 <sup>**</sup>	.40 <sup>**</sup> .57 <sup>**</sup>	.73 <sup>**</sup> .68 <sup>**</sup>	.55 <sup>**</sup> .67 <sup>**</sup>			
子育ての他者からの影響	.41 <sup>**</sup> .55 <sup>**</sup>	.44 <sup>**</sup> .46 <sup>**</sup>	.44 <sup>**</sup> .49 <sup>**</sup>	.60 <sup>**</sup> .49 <sup>**</sup>	.24 .33 <sup>*</sup>		
他者の対応の観察	.60 <sup>**</sup> .52 <sup>**</sup>	.41 <sup>**</sup> .33 <sup>*</sup>	.57 <sup>**</sup> .65 <sup>**</sup>	.52 <sup>**</sup> .60 <sup>**</sup>	.54 <sup>**</sup> .52 <sup>**</sup>	.58 <sup>**</sup> .68 <sup>**</sup>	

上段:1回目 .00 下段:2回目 .00 \*\*p<.01 \*p<.05

相関になるものもあった。

他者の省察の下位尺度間の相関は、1回目で「子どもの言動への関心」と「子育ての他者からの影響」では、強い相関が見られないが、ほとんどの下位尺度では、強い相関が見られた。

次に、1回目の結果と2回目の結果の比較では、相関係数は全体として高くなっている。多くの項目は、1回目と2回目を比較して高い相関が見られた。変化している下位尺度は「親としての在り方」と「子どもの特性」が、1回目.37が、2回目.45へ、「子どもの言動への関心」と「子育ての他者からの影響」が、1回目.24が、2回目.33になるなど比較的高い相関へと変化したものもある。

全体として子育ての内省の尺度間の相関は高い。子育ての内省に関する質問に答えること自体が内省を意識するきっかけとなったことと考えられるため、それぞれの尺度の相関を高める働きをしたと考えられる。

### 3、子育てに関する省察の t 検定について

親に関する省察、子どもに関する省察、他者に対する省察の各因子の尺度得点を算出し、平均値の差の検定を行った。結果は Table 5 に示す。子育ての語りの前と後のアンケートの結果のデータ数は、1回目、2回目とも (n = 45) である。

結果は、「親としての在り方」において 1% 水準で有意差がみられた (t(44) = 3.08, p < .01)。また、「他者の対応の観察」においては、5% 水準で有意差が見られた (t(44) = 2.25, p < .05)。したがって、親に関する省察の中の、「親としての在り方」で 1 回目より 2 回目は高かった。また、「他者の対応の観察」も 1 回目より 2 回目は 1 回目より 2 回目は高かった。

「親としての在り方」は、「4、親としての自分の長所・短所を考えることがある」、「3、親としての信念について考えることがある」、「10、子育ての方針を振り返り改善すべきところを考える」、「7、「子どもを育てる」ことはどういうことか考えることがある」、「9、子どもと話した後、自分の言い方が適切か

どうか考えることがある」からなる尺度であり、親の内省的な尺度である。1回目に比べ2回目が有意に高い結果は、「親としての在り方」の平均得点が上昇していることから、自分の親としての在り方を振り返り内省が深まったと考えられる。「他者の対応の観察」も、平均得点が有意に上昇し、他者の子どもに対する対応に関心を持って見ようとしている結果を得た。

また、先行研究の省察モデルでは、内省にかかわる出来事の直後と2, 3日後、1ヶ月後では内省に変化があるとされていることから、親自身の内省が、子育ての語りによって2回目の質問紙を書く時期までに変化したものと考えられる。また、親は、子育ての語りを経てよりしっかりと「他者の対応の観察」のように周りの人との子育ての観察から自分の子育てを見つめようとしていた。

Table5 子育ての省察の因子得点についての平均値

因子	n	1回目平均	2回目平均	平均の差	標準偏差	t値
コミュニケーション場面での対応	45	14.53	15.24	-.71	3.84	-1.24
親としての在り方	45	13.51	15.56	-2.04	4.46	-3.08**
子どもの特徴	45	13.91	13.27	.64	3.43	1.26
子どもの受け止め方	45	8.24	8.76	-.51	2.06	-1.66
子どもの言動への関心	45	14.47	14.51	-.04	2.17	-.14
子育ての他者からの影響	45	14.47	13.76	.71	3.95	1.21
他者の対応の観察	45	16.11	17.33	-1.22	3.64	-2.25*

注: \*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ .

### 第3節 親子間の信頼に関する尺度

#### 1、親子間の信頼に関する尺度の因子分析

先行研究（酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村.2002）では、主成分分析により1次元性を確認しているが、本研究では、コミュニケーションに関する項目を付け加えたことから因子分析を行い、尺度の特性を明らかにしたいと考えた。

そこで、1回目と2回目のデータを合わせて使い（ $n = 90$ ）親の信頼尺度を探索的に因子分析した。4因子が妥当であるとしたが、第4因子が1項目であることから、因子を3に固定して再び因子分析を行った。主因子法、プロマックス回転、因子固定「3」で因子分析を行った。結果をTable 6に示す。

因子負荷量は、どの項目も.40以上であることから、削除項目はなかった。次にCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、第1因子.75、第2因子.77、第3因子は.56となった。

第1因子は、「6、私は、この子といて幸せだ」、「7、私は、この子のことがだいすきだ」、「5、この子のことは、信頼している」、「12、私はこの子と話していると楽しい。」であった。親の子どもに対する思いが共通していることから、「親の子どもに対する思い」と命名した。

第2因子は、「1、この子は、だれよりも私のことが好きだと思う」、「2、この子は、だれよりも私のことを信頼していると思う」、「4、この子が何を考えているのか、どうしたいのかは、だれよりも私がわかっていると思う」、「3、この子は、私と一緒にいて幸せだ」であった。これらの項目には、子どもが親をどう思っているのかを取り上げているので、「子どもの親に対する思い」と命

名した。

Table 6 親子間の信頼に関する尺度の因子分析 (母親) n=90

項目	因子負荷量		
	I	II	III
第1因子「親の子どもに対する思い」 $\alpha = .75$			
6 私は、この子といて幸せだ	.89	-.18	-.04
7 私は、この子のことがだいすきだ	.86	-.01	-.17
5 この子のことは、信頼している	.62	.13	.21
12 私は、この子と話していると楽しい	.62	.04	-.09
第2因子「子どもの親に対する思い」 $\alpha = .77$			
この子は、だれよりも私のことが好きだと思う	-.03	.92	-.14
この子は、だれよりも私のことを信頼していると思う	-.05	.87	.03
4 この子が何を考えているのか、どうしたいのかは、だれよりも私がわかっていると思う	-.02	.75	.01
3 この子は、私と一緒にいて幸せだ	.36	.40	.09
第3因子「子どもとの日常的な関係」 $\alpha = .56$			
10 この子に、私はよくお手伝いを頼む	-.10	.02	.87
11 私は、この子とよく相談する	.01	-.18	.78
9 この子に、私はよく注意する	-.11	.03	.45
8 この子は、私の気持ちがよくわかると思う	.24	.20	.43

第3因子は、「10、この子に、私はよくお手伝いをたのむ」、「11、私はこのことよく相談する」、「9、この子に、私はよく注意する」、「8、この子は、私の気持ちがよくわかると思う」であった。これらの項目には、子どもとの関係の様子が共通していることから、「子どもとの日常的な関係」と命名した。

## 2、親子間の信頼に関する尺度内相関

親子間の信頼に関する尺度の下位尺度の相関に関する結果を Table 7 に示した。「親の子どもに関する思い」と「子どもの親に対する思い」には、1%水準の強い相関が見られた。また、この相関は、2回目も同じく強い相関になった。1回目も2回目も相関関係はあるが、子育ての語りそのものは、相関に影響しないことが分かる。つぎに、「親の子どもに対する思い」と「子どもとの日常的な関係」では、5%水準でやや強い相関が1回目には見られたが、2回目は相関係数が下がり、相関の強さは見られなかった。子育ての語りにより、親の子どもに対する思いが子どもとの日常的な関係とは別に捉えられるようになり切り離して考えられるようになったことが考えられ、親の思いの押しつけがすくなくなったのではないだろうか。「子どもとの日常的な関係」と「子どもの親への思い」は、1回目も2回目も有意な相関関係は見られず、子育ての語りによる影響がないことが分かった。

Table 7 親子間の信頼に関する尺度(母親)の相関関係

	親の子どもに対する思い	子どもの親への思い
子どもの親への思い	.47**	
	.51**	
子どもとの日常的な関係	.30*	.21
	.26	.10

上段:1回目, .00 下段:2回目 .00 \*\*\*p<.01 \*\*p<.05

## 3、親子間の信頼に関する尺度の t 検定

母親に対する親子間の信頼に関する尺度得点について質問紙は2回行い、対

応のある t 検定を行った。

Table8 親子間の信頼に関する尺度得点の平均値

	N	1回目平均	2回目平均	平均値の差	標準偏差	t 値
親の子どもに対する思い	45	14.82	14.73	.09	1.04	.57
子どもから親への思い	45	13.60	13.73	-.13	1.79	-.50
子どもとの日常的な関係	45	12.84	12.58	.27	1.81	.99

注: \*\*P<.01、\*P<.05、

結果は、Table 8 に示す通り、どの尺度でも有意差は見られなかった。したがって、親子間の信頼に関する尺度では、子育ての語りによる平均点の変化は、見られず親子間の信頼関係は変わらなかった。

#### 第4節 子育ての語りの効果について

##### 1、子育ての語りの効果の因子分析

子育ての語りの効果の項目は、子育ての語りの場面を想定して語りの効果測定を行うための質問項目である。

探索的な因子分析では、固有値が 1.0 を超える因子数が「3」であったので、主因子法、プロマックス回転、因子固定「3」で因子分析を行った。結果を Table 9 に示す。

第1因子には、11, 12, 13, 10, 9, 3, 5 の7項目が、第2因子には、8, 6, 22, 20, 14, 7, 19 の7項目が、第3因子には、16, 17, 15, 18, 4, 21 の6項目が抽出された。第1因子の因子負荷で.40以下となる項目は、「5、改めて子どもの成長を実感しましたか」の因子負荷が.37であったので、7項目と「5」を抜いた項目で、 $\alpha$ 係数を求めたところ、7項目では $\alpha = .91$ 、6項目では $\alpha = .92$ となることから「5、」を削除した。第2因子では、すべての項目で.40以上であることから、7項目で $\alpha$ 係数を求め $\alpha = .83$ となった。また、第3因子では、「4」.38、「21」.22であることから、因子負荷の低い「21 お子さんのメモを取る様子を気にかけて話しましたか」と「4、子育ての楽しい思い出は語れましたか」の入った6項目と「21」と「4」を抜いた4項目で $\alpha$ 係数を求めた。結果、6項目では、 $\alpha = .68$ 、4項目では $\alpha = .76$ となり、6項目が低いことから「21」と「4」を削除した。結果を Table 9 に示す。

第1因子は、「11、お子さんとの関係は深まったと思いますか」「12、語ることで、これまでの子育てに改めて自信が持てましたか」「13、語ることで、子育てをこれからも頑張っていこうという気持ちがあるようになりましたか」「10、お子さんは、話を聞く事で自分に自信が持てたと思いますか」「9、お子さんは話を聞いて、自分が大切に育てられていると感じとったと思いますか」「3、大きくなってきた様子を十分語ることはできましたか」の6項目で、母親の子育てに対してのエンパワーメントについての項目であることから「語りによるエンパワーメント」と命名した。

第2因子は、「8、子育ての相談をした経験を思い出しましたか」「6、子育ての中で忙しかった思い出は語れましたか」「22、お子さんに話を聞いた後の感想を聞きましたか」「20、お子さんの話を聞いている様子は気になりましたか」

か」「14、語ることで、今までの子育てに対して新しい見かたができましたか」「7、子育てに協力してもらった人のことは思い出しましたか」「19、お子さんにわかりやすく話す工夫をしましたか」の7項目では、子育てについてのこれまでを思い出す項目であることから「子育ての苦勞の語り」と命名した。

Table 9 子育ての語りの効果の因子分析の結果 N=45

番号	項目	I	II	III
第1因子 「語りによるエンパワーメント」 $\alpha=.92$				
11	お子さんとの関係は深まったと思いますか	.89	-.10	.02
12	語ることで、これまでの子育てに改めて自信が持てましたか	.88	.04	-.01
13	語ることで、子育てをこれからも頑張っていこうという気持ちが、わいてきましたか	.87	-.01	-.10
10	お子さんは、話を聞く事で自分に自信が持てたと思いますか	.86	.08	-.06
9	お子さんは、話を聞いて、自分が大切に育てられていることを感じとったと思いますか	.86	-.02	.00
3	大きくなってきた様子を十分に語ることはできましたか	.46	.16	.23
第2因子 「子育ての苦勞の語り」 $\alpha=.83$				
8	子育ての相談をした経験を思い出しましたか	-.01	.93	-.24
6	子育て中の忙しかった思い出は、語れましたか	.06	.89	-.09
22	お子さんに、話を聞いたあとの感想を聞きましたか	.05	.57	-.03
20	お子さんの話を聞いている様子は気になりましたか	-.09	.55	.10
14	語ることで、今までの子育てに対して新しい見方ができましたか	.24	.53	.04
7	子育てに協力してもらったことは思い出しましたか	.10	.49	.22
19	お子さんにわかりやすく話す工夫はしましたか	-.09	.44	.29
第3因子 「語りの場面でのやり取り」 $\alpha=.76$				
16	お子さんは、話を聞いている時いろいろ質問しましたか	-.02	-.19	1.03
17	お子さんは、話を聞いた後で質問しましたか	-.04	-.01	.70
15	お子さんは、興味を持って聞きましたか	-.08	.07	.67
18	お子さんに話した内容は、うまく伝わったと思いますか	.01	.12	.47

削除項目

- 4 子育て中の楽しい思い出は、語れましたか
- 5 改めて子どもの成長を実感できましたか
- 21 お子さんのメモをとる様子を気にかけてながら話しましたか

第3因子は、「16、お子さんは話を聞いている時にいろいろ質問しましたか」「17、お子さんは話を聞いた後で質問しましたか」「15、お子さんは興味を持って話を聞きましたか」「18、お子さんに話した内容はうまく伝わったと思いますか」の4項目で、語りの場面に関する項目が多いことから「語りの場面でのやり取り」と命名した。

3つの尺度については、語りの場面でのこと、そして親の語りの場面での配慮や気づきについての内容になっていた。これらの質問は「子育ての語り」の後でとられた2回目にも実施した質問項目であるが、語りの前の1回目との関係がある部分もあるので、その点についても関係を調べたいと考えた。

2、子育ての語りの効果の尺度内相関について

子育ての語りに関する質問項目の尺度内相関については、Table10に示した。「語りによるエンパワーメント」と「語りの場面でのやり取り」では、強い相関が見られた。

Table 10 子育ての語りの効果尺度の相関関係

	語りによるエンパワーメント	子育ての苦勞の語り
子育ての苦勞の語り	.27	
語りの場面でのやり取り	.48**	.20

\*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05

この結果より「場面でのやり取り」がより活発であれば、「語りによるエンパワーメント」の得点が高くなると考えられる。親は語りの場面で子どもとのやり取りが積極的であれば、子育てに対してポジティブに向き合うことができるということが分かる。

### 第5節 子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、親子の信頼感に関する尺度の尺度間の関連

子育てに関する省察尺度、親子の信頼感に関する尺度、そして、子育ての語りの効果の相関を見た。Table11が1回目、Table12が2回目の子育てに関する省察尺度と親子の信頼感尺度と子育ての語りの効果尺度の相関係数を求めた結果である。

#### 1. 1回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、親子の信頼感に関する尺度の相関

Table11で、強い相関が見られるのは、「子どもの受け止め方」と「子育ての苦勞の語り」の相関、「子育ての他者の影響」と「子育ての苦勞の語り」の相関であった。子育ての語りの前の関係においてこれから語り始めることについて子どもがどんな反応をするのかということに親として関心があったことが考えられる。「子育ての苦勞の語り」は、子育ての相談や子育て中の忙しさについて問う質問項目であるので、語りの前の親としては内容を含めてどのように話して行こうかと考える機会になったと考えられる。次に「子育ての他者の影響」と「子育ての苦勞の語り」の相関については、「子育ての他者の影響」は、子育ての中で、他の人の子育ての様子や話から自分の子育てについての気づきや方針の変更について考える項目であるので、「子育ての苦勞の語り」の内容と関係性が強まったのだと考えられる。

table11 子育てに関する省察と親子の信頼感尺度と子育ての語りの効果との相関(1回目)

	コミュニケーション場面での対応	親としての在り方	子どもの特性	子どもの受け止め方	子どもの言動への関心	子育ての他者からの影響	他者の対応の観察
親の子どもに対する思い	.00	-.01	.20	.04	.12	-.10	.02
子どもの親への思い	-.06	-.15	.24	.08	.21	.11	.18
子どもとの日常的な関係	.19	-.03	.30*	.30*	.02	.24	.22
語りによるエンパワーメント	.13	.05	.32*	.22	.24	.18	.13
語りの場面でのやり取り	-.07	-.04	.15	.02	.17	.07	.01
子育ての苦勞の語り	.20	.16	.29	.43**	.27	.64**	.46**

\*\*p&lt;.01 \*P&lt;.05

やや強い相関があるのは、「子どもの特性」への省察と「子どもとの日常的な関係」、「語りによるエンパワーメント」であった。また、「子どもの受け止め方」と「子どもの日常的な関係」でもやや強い相関があった。ここから考えられる

ことは、子どもの特性に注目することで日常的な親子の関係がよくなっていくことや子どもの特性をつかむことが親の子育ての考え方につながり親をエンパワーしていくと考えられる。また、「子どもとの日常的な関係」と「子どもの受け止め方」は、日常的な子どもとの関係がうまくできていれば、子どもも親のことを肯定的に見ていると考えられる。

## 2, 2回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、親子の信頼感に関する尺度の相関

Table12 について見ていくと、親が子育ての様子を話した後の結果であり、「語りによるエンパワーメント」と「コミュニケーション場面での対応」への省察、「親としての在り方」、「子どもの特性」への省察に強い相関が出ている。子どもとの日常的なコミュニケーションへの省察場面でのやりとりに関心を持つことや、親としての在り方について考えること、子どものいいところや個性について見ていくことが、親のエンパワーにつながるということが考えられる。また、「語りの場面でのやり取り」と「親としての在り方」でも強い相関が見られる。これから話をしようとする親が語りの場面でのやり取りがうまくできれば、親としての在り方も良い方向へ向かうであろうという考えであるということではないだろうか。

table12 子育てに関する省察と親子の信頼感尺度と子育ての語りの効果との相関(2回目)

	コミュニケーション場面での対応	親としての在り方	子どもの特性	子どもの受け止め方	子どもの言動への関心	子育ての他者からの影響	他者の対応の省察
親の子どもに対する思い	.11	.19	.10	-.06	.10	-.06	-.10
子どもの親への思い	-.03	.11	.00	-.14	.10	-.16	-.25
子どもとの日常的な関係	.14	.03	.22	.31*	.18	.04	.11
語りによるエンパワーメント	.45**	.43**	.40**	.26	.30*	.26	.17
語りの場面でのやり取り	.05	.23	.13	.04	.00	.13	-.01
子育ての苦勞の語り	.19	.05	.24	.25	.12	.36*	.38*

\*\*p<.01 \*p<.05

やや強い相関としては、「語りによるエンパワーメント」と「子どもの言動への関心」への省察がある。強い相関で見られた親の子育てに対するエンパワーにつながる尺度として「子どもの言動への関心」も含まれるのではないかと考える。その他のやや強い相関は「子育ての苦勞の語り」と「子育ての他者からの影響」との関係にある。「子育ての苦勞の語り」は、母親が子育ての様子を思い出すことが内容となっている、そこには他者からの助言や協力などからお互いの因子についての関係が強くなったことが考えられる。もう一つのやや強い相関は、「子どもの受け止め方」と「子どもとの日常的な関係」である。子どもたちがどのように子育ての話聞いたのかについては、親子の日常的な関係と関係があるということである。

## 3, 1回目の相関と2回目の子育ての語りの効果と子育てに関する省察尺度、親子の信頼感に関する尺度の相関の比較

Table11、Table12の比較を行った。1回目の相関関係では、「子育ての語り」との関係で強い相関が見られたが、2回目は、「語りによるエンパワーメント」

との関係で強い相関が見られるようになった。この変化は、親の関心を持つ項目の変化と考えられる。語る前は、子育ての語りをどのようにするのかについて関心が強く、子育ての語りの後は、語りによるエンパワーメントが行われて強い相関の項目が現れたと考える。強い相関のある尺度は、1回目と2回目が重なるものがなかったことから、語りの前と後では関心を持つ項目が変化したと考える。

やや強い相関の変化については、1回目にあったやや強い有意な相関が2回目にはなくなったのは「子どもの特性」と「子どもとの日常的な関係」であった。次に相関が強くなったのは、「子どもの特性」と「語りによるエンパワーメント」である。やや強い相関から強い相関に変化している。子どもそれぞれの長所や短所に関心を持つことなどが、母親の子育ての姿勢を前向きにすると考えられる。また、「子育ての他者からの影響」と「子育ての苦勞の語り」は、1回目には強い相関であったものが、2回目ではやや強い相関になっている。子育ての語りを行うことが他者からの影響とこれまでの子育ての苦勞の間の影響が弱くなったと考えられる。これは、前記の「子どもの特性」と「語りによるエンパワーメント」がやや強い相関から強い相関に変化していることとの関係と相反する変化であると考えられる。そして、1回目にはなかった有意でない相関が2回目に有意になって表れたのは、「子どもの言動への関心」と「語りによるエンパワーメント」の相関である。母親は子育ての語りを行うことで、子どもの言動に関心をもち自身の子育てに対する考えを強めていったと考える。

#### 4、親子の信頼感に関する尺度と子育ての語りの効果との相関

親子の信頼感に関する尺度と子育ての語り効果尺度との相関について1回目はTable 13、2回目はTable 14が結果である。

Table 13 親子の信頼感尺度と子育ての語りの効果尺度との相関（1回目）

	親の子どもに対する思い	子どもの親に対する思い	子どもとの日常的な関係
語りによるエンパワーメント	.56**	.44**	.24
子育ての苦勞の語り	.04	-.02	.17
語りの場面でのやり取り	.38*	.34*	.17

\*\*p<.01 \*p<.05

Table 14 親子の信頼感尺度と子育ての語りの効果尺度との相関（2回目）

	親の子どもに対する思い	子どもの親に対する思い	子どもとの日常的な関係
語りによるエンパワーメント	.45**	.34*	.14
子育ての苦勞の語り	.00	-.10	.42**
語りの場面でのやり取り	.44**	.28	.12

\*\*p<.01 \*p<.05

1回目の高い相関を示す尺度は、「語りによるエンパワーメント」と「親の子どもに対する思い」、「語りの場面でのやり取り」であった。やや強い相関は、「語りの場面でのやり取り」と「親の子どもに対する思い」「子どもの親に対する思い」であった。

2回目の高い相関を示す尺度は「語りによるエンパワーメント」と「語りの場面でのやり取り」と「親の子どもに対する思い」であった。そして、「子育て

の苦勞と語り」と「子どもとの日常的な関係」も強い相関が見られた。またやや強い相関は、「語りによるエンパワメント」と「子どもの親に対する思い」であった。

1回目と2回目の比較では、高い相関の尺度で変わらない関係は、「語りの場面でのやり取り」と「親の子どもに対する思い」であった。相関係数が上がった尺度は、「語りの場面でのやり取り」と「子どもの親に対する思い」であった。そして、「子育ての苦勞と語り」と「子どもとの日常的な関係」が有意な相関が見られない状態から強い相関になった。

強い相関がやや強い相関になったのは、「語りのエンパワメント」と「子どもの親に対する思い」であった。「語りの場面でのやり取り」と「子どもの親に対する思い」は、やや強い相関があったものが弱くなった。

1回目と2回目の間に行われた親の子育ての語りによる相関の変化が考えられる。全体として1回目は「語りによるエンパワメント」との関係で「親の子どもに対する思い」や「子どもの親に対する思い」が強い相関になっているが、2回目は、「子育ての苦勞と語り」と「子どもとの日常的な関係」に相関の関係がひろがっている。

## 第6節 子育ての語りの効果

### 1、子育ての自己評価による高群と低群の分類

「1、語る前に、これまでの子育てはうまくいっていると思っていましたか」「2、語る前に、これまで子育てをがんばってきたことに自信をもっていましたか」の2項目について、これまでの子育てをどのように考えてきたかについて分類する得点基準にするため抜き出し残りの20項目で因子分析や相関係数を求めてきた。

2項目の得点合計の平均値(M=6.09, SD=1.62)によって対象を低群・高群の2群に分類した。得点6以下のデータを低群 n=24、得点7以上のデータを高群 n=21とした。

### 2、子育ての自己評価の低群・高群によるt検定の比較

子育ての自己評価についての項目は、これまでの自分の子育てに対して母親が、子育てはうまくいっていると思うか、子育てを頑張ってきたことに自信が持て

Table15 低群 子育ての省察尺度と親子間の信頼に関する尺度(親)得点平均値

因子	n	1回目平均	2回目平均	平均の差	標準偏差	t値
コミュニケーション場面での対応	24	20.50	20.58	-.08	4.24	-.10
親としての在り方	24	8.29	8.96	-.67	2.04	-1.60
子どもの特徴	24	16.88	16.58	.29	2.60	.55
子どもの受け止め方	24	8.21	8.63	-.42	1.44	-1.42
子どもの言動への関心	24	10.54	10.13	.42	1.61	1.27
子育ての他者からの影響	24	14.33	14.42	-.08	1.91	-.21
他者の対応の観察	24	16.42	17.33	-.92	3.27	-1.37
親の子どもに対する思い	24	14.08	14.13	-.04	1.27	-.16
子どもから親への思い	24	12.79	13.00	-.21	1.72	-.59
子どもとの日常的な関係	24	12.67	12.38	.29	1.46	.98

注: \*\*P<.01, \*P<.05、

ているか、つまり成功体験としているのか、自分の頑張りを評価しているかについて聞いた質問項目である。

低群の平均値と t 検定の結果を table15 に示す。低群は、語りの前後で有意な差は見られなかった。得点の平均値では、子育ての語りによる得点平均の変化が見られなかった。

次に高群の結果を table16 に示す。高群では、1%水準で「親としての在り方」尺度得点の平均に有意差が見られた。また、5%水準で「コミュニケーション場面での対応」に平均値に有意な差が見られた。

高群の得点が高いことは、これまでの子育てはうまくいっていてよく頑張ったと考えている親の考えであり、得点が低いということは、これまでの子育ては、あまりうまくいっていないおらず、頑張ったとは思っていないという親の考えである。

Table16 高群 子育ての省察尺度と親子間の信頼に関する尺度(親)得点平均値

因子	n	1回目平均	2回目平均	平均の差	標準偏差	t値
コミュニケーション場面での対応	21	19.24	22.24	-3.00	5.81	-2.37*
親としての在り方	21	7.95	10.00	-2.05	3.15	-2.98**
子どもの特徴	21	18.05	17.90	.14	4.61	.14
子どもの受け止め方	21	8.29	8.90	-.62	2.64	-1.08
子どもの言動への関心	21	11.43	11.10	.33	1.93	.79
子育ての他者からの影響	21	12.24	13.00	-.76	4.84	-.72
他者の対応の観察	21	15.76	17.33	-1.57	4.07	-1.77
親の子どもに対する思い	21	15.67	15.43	.24	.70	1.56
子どもから親への思い	21	14.52	14.57	-.05	1.91	-.11
子どもとの日常的な関係	21	13.05	12.81	.24	2.19	.50

注: \*\* $P < .01$ 、\* $P < .05$ 、

t 検定では、高群の親にのみ有意な差が認められた。1 回目と 2 回目の間で行われた子育ての語りによる差であることが考えられる。「親としての在り方」と「コミュニケーション場面での対応」の平均点は上がった。

高群の親は、「親としての在り方」と「コミュニケーションの場面での対応」に関する省察の得点があがり、よく省察するようになったと考えられる。そして、低群は、子育ての語りが省察得点に変化を与えることがなかったと考えられる。

## 2、子育ての自己評価の低群・高群による相関の比較

子育ての自己評価の項目は、これまでの自分の子育てに対して母親が成功体験としているのか、自分の頑張りを評価しているかについて聞いた質問項目である。その得点の低群・高群での相関係数を算出した。

### 1-1 子育ての自己評価の低群の相関

低群の結果について Table17 に示す。

子育てに関する省察尺度の下位尺度相関は、どの尺度間でも強い相関が 1 回目も 2 回目も算出された。低群の母親の子育て省察に対する下位尺度間の関係は強く、それは子育ての語りよる変化なく最初も相関が強く、子育ての語りの後も変わらなかった。

次に、親子間の信頼に関する尺度の 1 回目は、どの下位尺度とも強い相関が

見られない。しかし、2回目は、尺度内相関がいずれも高くなった。

子育てに関する省察尺度との相関は語りの前は何れとも有意な相関が見られなかったが語りの後は、「子どもとの日常的な関係」との間に相関が見られるようになった。

Table17 子育ての不安についての質問項目低群の相関

	コミュニケーション場面での対応	親としての在り方	子どもの特性	子どもの受け止め方	子どもの言動への関心	子育ての他者からの影響	他者の対応の観察	親の子どもに対する思い	子どもの親に対する思い	子どもとの日常的な関係
親としての在り方	.74** .70**									
子どもの特性	.70** .84**	.59** .62**								
子どもの受け止め方	.85** .87**	.72** .69**	.71** .79**							
子どもの言動への関心	.73** .78**	.63** .66**	.74** .77**	.63** .77**						
子育ての他者からの影響	.71** .87**	.77** .69**	.77** .85**	.79** .79**	.57** .77**					
他者の対応の観察	.63** .69**	.67** .52**	.73** .80**	.59** .59**	.61** .64**	.76** .79**				
親の子どもに対する思い	.07 .72	.05 .16	.18 .09	.07 -.02	.05 .07	.13 -.07	.09 -.13			
子どもに対する親の思い	.16 .09	.18 .28	.29 -.06	.13 -.04	.16 .06	.26 -.10	.27 -.28	.34 .60**		
子どもとの日常的な関係	.23 .49*	.13 .49*	.25 .44*	.40 .42*	-.07 .33	.40 .31	.16 .119	.36 .55**	.20 .55**	
語りによるエンパワーメント	.32 .54**	.30 .39	.31 .44*	.29 .32	.11 .27	.57** .54**	.41* .30	.48* .34	.36 .32	.31 .23
子育ての苦衷の語り	.28 .48*	.29 .33	.34 .46*	.27 .35	.37 .34	.53** .44*	.52** .48*	.10 -.02	-.15 -.09	-.05 .04
語りの場面でのやり取り	.02 .20	.06 .35	.16 .08	.07 .16	.04 -.10	.20 .07	.23 -.07	.41* .42*	.48* .40	.34 .36

上段:1回目 00 下段:2回目.00 \*\*PK.01 \*PK.05

「コミュニケーション場面での対応」「親としての在り方」「子どもの特性」「子どもの受け止め方」の下位尺度との相関は、1回目強い相関は見られなかったが、2回目はやや強い相関が算出された。子育ての語り、これらの相関を強めたと考えられる。

子育ての語りの効果の下位尺度は、「語りによるエンパワーメント」との関係では、「子育ての他者からの影響」が、1回目も2回目も強い相関が見られ、語りに関係なく常に強い関係のある尺度であることが示された。また、「語りによるエンパワーメント」との関係で、「他者の対応の観察」と「親の子どもに対する思い」は1回目にやや強い相関があったが、2回目の結果では有意な相関が見られなかった。「コミュニケーション場面での対応」は、1回目は強い相関が見られなかったが、2回目は強い相関が示された。子育ての語り以前は、他者との関係や、自分の子どもに対する思いと子育てをエンパワーすることに関係があったが、語りの後は、自分自身の子どもとのコミュニケーション場面での様子にエンパワーされている母親の姿が示された。より具体的なコミュニケーション場面での省察が語りの効果に関連があると考えられる。

しかし、「コミュニケーション場面での対応」と「子どもの特性」は、1回目は強い相関が見られなかったが、2回目はやや強い相関が算出され子育ての語りの影響が観測された。省察と語りの効果に関連があることが示された。

「語りの場面でのやり取り」と省察では、有意な強い相関は見られなかった。やや強い相関は「親の子どもに対する思い」と「子どもの親に対する思い」に1回目は見られた。しかし、2回目の結果は「親の子どもに対する思い」の結果は同様であったが、「子どもの親に対する思い」は、強い相関は見られなくなった。子育ての語りは、語りの場面でのやりとりで、母親の子どもに対する思いには変わりのないものの、子どもが母親に対して抱く感情について考えることに変化を与えていることが分かる。

### 1-2 子育ての自己評価の高群の相関

子育ての自己評価の高群の相関について Table18 に示した。

高群では、子育ての省察に関する下位尺度間の相関は高い相関にばらつきがある。

親子間の信頼尺度の下位尺度間相関は、語りの前も後も有意な相関は全くみられなかった。また、高群においては省察と親子の信頼に関連がないことが示された。

子育ての語りの効果尺度では、「語りによるエンパワーメント」で高い相関を示すものは1回目も2回目もない。「子育ての苦勞の語り」では、「子どもの受け止め方」、「子育ての他者からの影響」に強い相関が見られたが、2回目の結果は、強い相関が見られなくなった。また、「子育ての苦勞の語り」2回目では、「子どもとの日常的な関係」において、1回目にはなかった強い相関が表れた。

Table18 子育て不安についての質問項目高群の相関

	コミュニケーション場面での対応	親としての在り方	子どもの特性	子どもの受け止め方	子どもの言動への関心	子育ての他者からの影響	他者の対応の観察	親の子どもに対する思い	子どもの親に対する思い	子どもとの日常的な関係
親としての在り方	.48 <sup>**</sup> .75 <sup>**</sup>									
子どもの特性	.70 <sup>**</sup> .43	.14 .25								
子どもの受け止め方	.37 .44 <sup>*</sup>	.42 .27	.60 <sup>**</sup> .80 <sup>**</sup>							
子どもの言動への関心	.53 <sup>*</sup> .39	.20 .47 <sup>*</sup>	.70 <sup>**</sup> .67 <sup>**</sup>	.52 <sup>*</sup> .67 <sup>**</sup>						
子育ての他者からの影響	.08 .29	.06 .38	.15 .16	.49 <sup>*</sup> .16	-.01 .14					
他者の対応の観察	.58 <sup>**</sup> .38	.27 .27	.49 <sup>*</sup> .55 <sup>**</sup>	.49 <sup>*</sup> .67 <sup>**</sup>	.54 <sup>*</sup> .46 <sup>*</sup>	.46 <sup>*</sup> .67 <sup>**</sup>				
親の子どもに対する思い	.07 -.29	.02 .03	.07 -.27	-.02 -.34	-.07 -.18	-.19 .09	.03 -.14			
子どもに対する親の思い	-.22 -.39	-.51 -.17	.07 -.09	.04 -.28	.12 -.04	.24 -.17	.20 -.28	.23 .04		
子どもとの日常的な関係	.18 -.17	-.16 -.26	.34 .04	.23 .24	.06 .07	-.16 -.17	.27 .10	.28 -.27	.17 -.25	
語りによるエンパワーメント	.05 .22	-.19 .38	.27 .24	.21 .22	.29 .20	-.01 .17	-.04 .09	.27 .35	.23 .05	.12 .00
子育ての苦勞の語り	.14 -.24	.05 -.20	.24 -.02	.55 <sup>**</sup> .17	.16 -.06	.82 <sup>**</sup> .32	.42 .37	-.19 -.04	.08 -.15	.35 .67 <sup>**</sup>
語りの場面でのやり取り	.25 .09	.10 .38	.33 .08	.18 .07	.25 .17	.03 .47	-.03 .15	.01 .44 <sup>*</sup>	-.04 -.02	-.05 -.13

上段:1回目 00 下段:2回目 00 \*\*PK.07 \*PK.06

### 1-3 子育ての自己評価の低群と高群の相関の比較

子育ての自己評価の低群と高群の相関についてみてきた。両群には、特徴的な相関の現れ方があるのでその点について述べたい。

まず、低群では、子育てに関する省察尺度の下位尺度内において、どの尺度

間にも強い相関がみられ、その相関関係は子育ての語りの後も依然続く。相関係数は、やや上昇するもの、やや下降するものもあるが、全体として強い相関は維持される。

しかし、高群では、強い相関を示す下位尺度間の関係は少なく、「子どもの特性」、「子どもの受け止め方」「子育ての対応の観察」との相関に集中する。その傾向はプログラムの前も後も同じ傾向であった。

これらの変化から、低群のこれまでの子育ての自己評価の低かった母親は、1回目の省察と2回目の省察いずれにも、わが子の子育てにいろいろな関心や注意を払おうとしていることがわかる。また、高群では、これまでの子育てに自己評価の高い母親であるので、親自身のことよりも子どもの様子や他者との関係から自分の子育てを考えることが多く、語りによる変化は小さいのではないかと考えられる。

親子の信頼に関する下位尺度では、低群では全く相関が見られなかったものが子育ての語りの後は、特に、「子どもとの日常的な関係」に強い相関が見られるようになった。これは、子育ての語りによる変化であると考えられる。語りによって、親が「子どもとの日常的な関係」に関心や注意を払おうとしていることがわかる。それに対して、高群では、1回目も2回目いずれにも強い相関関係もやや強い相関関係も見られず、子どもに対する見方が厳しくなっていると考えられる。

次に子育ての語りの効果の下位尺度では、低群の親が高群にくらべて大きい。低群では「子育てのエンパワーメント」の関係において、「他者の対応の観察」、「親の子どもに対する思い」に強い相関やや強い相関がみられていたものが、「コミュニケーション場面での対応」や「子どもの特性」に強い相関やや強い相関が見られるようになってきている。他者やこれまでの子どもに対する信頼感に向いていた関心が、母親自身の子育て場面での子どもに対する語りかけや、子どもそれぞれが持つ特性に目を向けようとしているのではないだろうか。「子育ての苦労の語り」においても傾向は同じようで、1回目は「子育ての他者からの影響」や、「他者の対応の観察」に強い相関が見られたものが、2回目は分散し「コミュニケーション場面での対応」と「子どもの特性」もやや強い相関を示すようになり「子育ての他者からの影響」と「他者の対応の観察」も強い相関からやや強い相関に変化している。ここでも、他者から自分自身や子どものことに関心が売っていることが推測できる。高群にはそうした状況は見られず、「子育ての苦労の語り」との相関で、1回目「子どもの受け止め方」と「子育ての他者からの影響」に高い相関が見られたが、2回目は「子どもとの日常的な関係」に強い相関がうつつている。高群の子育ての語りによる変化は、語る前は省察に下位尺度に関心が向いていたが、語りを終えると内省よりも子どもとの関係に関心が移ったのではないかと考える。

#### 4、子育ての語りの効果と子育てに関する省察の重回帰分析

子育ての語りの効果尺度について、親の省察との関係をより詳しく見るために重回帰分析を行った。

重回帰分析では、変数間の因果関係を明らかにすることができるため、基準変数として子育ての語りの効果を、説明変数として子育てに関する省察尺度の下位尺度で行った。基準変数は「語りによるエンパワメント」・「子育ての苦勞の語り」・「語りの場面でのやり取り」を子育ての省察尺度の7つの下位尺度を説明変数として投入した。それぞれ、子育ての語り前を1回目、子育ての語りの後を2回目として実行した。解析はステップワイズ法によるものである。低群の結果を Table19 に示す。

低群で1回目「語りによるエンパワメント」を基準変数とする分析では、ステップワイズ法で分析したところ、「子育ての他者からの影響」のみ回帰式に投入された。ただし、 $R = .567$ 、 $R^2 = .321$ と高い相関が見られ、説明率の高い単回帰式が得られたと言える。また投入された「子育ての他者からの影響」の回帰係数  $\beta = .424$  (標準化  $\beta = .567$ ) で、1%水準で回帰係数が有意であることが確認された。低群で1回目「子育ての苦勞の語り」を基準変数とする分析では、ステップワイズ法で分析したところ、「子育ての他者からの影響」のみ回帰式に投入された。ただし、 $R = .530$ 、 $R^2 = .281$ と高い相関が見られ、説明効率の高い単回帰式が得られたと言える。また投入された「子育ての他者からの影響」の回帰係数  $\beta = .560$  (標準化  $\beta = .530$ ) で、1%水準で回帰係数が有意であることが確認された。

Table19 子育ての語りの効果と子育て省察尺度の重回帰分析(低群) ステップワイズ法

説明変数	語りによるエンパワメント		子育ての苦勞の語り		語りの場面でのやり取り	
	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数
コミュニケーション場面での対応		.541**		.478*		
親としての在り方						
子どもの特徴						
子どもの受け止め方						
子どもの言動への関心						
子育ての他者からの影響	.567**		.530**			
他者の対応の観察						
調整済みR <sup>2</sup>	.291	.260	.248	.193		
F値	3.229**	9.081**	8.599**	6.517*		

低群で2回目「語りによるエンパワメント」を基準変数とする分析では、ステップワイズ法で分析したところ、「コミュニケーション場面での対応」のみ回帰式に投入された。ただし、 $R = .541$ 、 $R^2 = .292$ と高い相関が見られ、説明効率の高い単回帰式が得られたと言える。また投入された「コミュニケーション場面での対応」の回帰係数  $\beta = .258$  (標準化  $\beta = .541$ ) で、1%水準で回帰係数が有意であることが確認された。低群で2回目「子育ての苦勞の語り」を基準変数とする分析では、ステップワイズ法で分析したところ、「コミュニケーション場面での対応」のみ回帰式に投入された。ただし、 $R = .478$ 、 $R^2 = .229$ の相関が見られ、説明効率のやや高い単回帰式が得られたと言える。また投入された「コミュニケーション場面での対応」の回帰係数  $\beta = .321$  (標準化  $\beta = .478$ ) で、5%水準で回帰係数が有意であることが確認された。

1回目の基準変数が「語りによるエンパワメント」であっても、「子育ての

苦勞の語り」であっても、規定要因として「子育ての他者からの影響」が抽出された。そして、2回目は、基準変数が「語りによるエンパワーメント」であっても、「子育ての苦勞の語り」であっても、規定要因として「コミュニケーション場面での対応が」が抽出された。

次に、高群を Table20 に示す。

Table20 子育ての語りの効果と子育ての省察尺度の重回帰分析(高群) ステップワイズ法

説明変数	語りによるエンパワーメント		子育ての苦勞の語り		語りの場面でのやり取り	
	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数	1回目 標準偏回帰係数	2回目 標準偏回帰係数
コミュニケーション場面での対応						
親としての在り方						
子どもの特徴						
子どもの受け止め方						
子どもの言動への関心						
子育ての他者からの影響			.715**			
他者の対応の観察						
調整済みR <sup>2</sup>			.662			
F値			20.579**			

高群で1回目「子育ての苦勞の語り」を基準変数として、ステップワイズ法で分析したところ、「子育ての他者からの影響」のみ回帰式に投入された。ただし、 $R = .834$ 、 $R^2 = .662$ の相関が見られ、説明効率のやや高い単回帰式が得られたと言える。また投入された「コミュニケーション場面での対応」の回帰係数  $\beta = .871$  (標準化  $\beta = .715$ ) で、1%水準で回帰係数が有意であることが確認された。

高群では、「子育ての苦勞の語り」が基準変数の1回目のみが回帰式に投入されただけであった。高群1回目「子育ての苦勞の語り」の規定要因として「子育ての他者からの影響」が抽出された。

## 第7節 感想の記述

語り後の2回目の調査で記入された感想を、低群・高群に分けて Table21 に示す。

低群では、これまでの子育てを振り返るのによい機会と考える記述が見られる。忙しすぎて忘れていたり、気に留めずに過ごしたけれど改めて見てみるこうだったなど、振り返ることで自分なりに子育てを見直している記述である。そして、今後は、子どもと一緒に成長していきたいなど、親としての成長に目を向けていることから、子育ての省察を行うことでこれまでの子育て全体を見なおして気づいたことが多かったという感想が多く見られた。

高群では、個々の具体的な事例が書かれている。そして振り返るというよりは、その場面での出来事や、これらに対して前向きな姿勢がうかがえる記述が多い。話すことの効果については評価しているが、自分の子育てを省察するよりは、語ることの効果や語りの場面についての捉え方を表現している。

低群と高群では、子育ての語りの体験から受けた印象にそれぞれ特徴があり、こうした印象の違いは語りや、母親のエンパワーメントに影響を与えていることと関連があると考えられる。低群は、これまでの子育て全体に対して感

じていることを表現しているのに対して、高群では、語りの場面に関する感想が多く、場面に対して自分がどう感じたかという点に母親の意識が向いていることが読み取れる。

Table 21 子育ての語りを終えての感想の記述(高群・低群)

低群の感想	
1	〈忙しかった子育ての思い出〉〈これまでを振り返るよい機会〉 忙しかったのか、記録していたのも赤ちゃんの時のことがほとんどで、3～5歳までのことを書きとめていなかったため、すこずつ思い出しながら話しました。写真の整理をするよい機会になりました。
2	〈これまでの子育ての高評価〉〈これからの子育ての不安〉〈親としての成長〉 素直な子に育っていると思います。これからどんな子になるかと不安ではありますが、私も一緒に親として育っていきたいと思っています。
3	〈子育て中の時間の感じ方〉 昔の話として語っていて、7年も過ぎたのかと改めて時間がたつのは早いなと思いました。
4	〈これまでを振り返るよい機会〉〈子育てに追われる日々の記憶〉 今まで赤ちゃんのころの話をすることが余りなかったので、とてもよい機会でした。初めての子どもだったので、私自身、日々の子育てに追われているだけで、思ったほど記憶に残っていませんでした。
5	〈これまでを振り返るよい機会〉〈子どものことをじっくり考える〉 忙しい生活の中で、子どものことについてじっくり考えられる機会があり、よかったなと思います。
6	〈仕事による、子どもへの影響〉〈これからの子育てのポイント〉 仕事をしながらの子育てで、夜の仕事もありさみしい思いをさせていると思います。あまり自分のことを口に出さない子ですが、少しずつ自分の気持ちを出してくれたらとゆっくり待っています。
高群の感想	
1	〈子育ての大変さ〉〈生きていることの大切さ〉 話を聞かせてと言われ子ども自身が大変な思い(しゃべれないけど)をしてきて、私自身も病院一検査で、1歳過ぎまで記憶がほとんどなく、写真も上の子とちがいで、乳児の時の分がなくて、申し訳ない気持ちになりました。長所はと聞かれたら生きていくことでと堂々答えます。(兄、姉、妹3人とも)
2	〈自分の子育てについて〉〈上の子の協力〉 3番目とあって少し甘やかし、放任主義なところもあったかと思いますが、上の子からの指摘、カパーによって一緒に2年生に育ってきた気がします。少し臆病なところもあるが、上の子を見ながら自分の一歩を様子を見て出している様子を見守って行きたいと思っています。
3	〈伝えることの大変さ〉〈小さい頃のかかわらしさ〉〈語ることのたのしさ〉 子どもに書きとらせるのは大変だったけど、小さい頃のかかわらしかった話をするのは、とても楽しかったです。
4	〈伝えることの大変さ〉〈子どもとの会話による気づき〉〈話すことの効果〉 あまり小さい頃の話は本人も覚えていないことが多く、伝えることが難しかった。また、子どもが思っている大きな出来事と親が思っている大きな出来事が違うことを知り振り返ったり、たくさんお話することで少しでも共有できたのかと感じました。

## 第四章 考察と課題

### 第1節 子育ての語りによる内省の変化

#### 1、子育ての語りと子育てに関する省察の変化

2年生の母親にとってそれまでの子育てを語ることでどのような内省的な変化を生むのかについて調べるために、子育てに関する省察尺度の7つの因子から、コミュニケーションに関わる対場面的な要因(1次的省察)と、内省の深

まりを示すものに分かれるなど内省に階層的な分類があることを確認した。しかし、2次的3次的省察に分類することは難しかった。

子育てに関する省察の1回目と2回目の平均点の比較(t検定)では、1%水準で「親としての在り方」への省察が有意に増加した。この尺度は内省的な考えの下位尺度であることから、母親の内省的な深まる傾向の変化が起こっているのがわかる。また、5%水準で「他者の対応の観察」も有意に増加し、対場面的な1次的省察の内省が深まったと考えられる。子どもに関する省察では、有意な差のある項目がないことから、親自身に関する省察、他者をとおした省察での得点の増加によって内省の変化が起きている結果であると考えられる。このことは、子育ての語りは、他者をとおした省察では対場面的なその場の対応に対する考えを、親自信に関する省察では、母親の内省的な考えを変化させたことが考えられる。朴・杉村(2009)の研究では、低次の省察は高次の省察に影響を及ぼし、全体的に他者をとおした省察へ影響が見られるという結果を得ている。しかし、測定が事前、事後であることから時間的に内省の深まりを表す親の内省的な変化については確認できていない。

子育てに関する省察の尺度内の相関は、全体に高く、1回目も2回目もほとんど全部の項目で1%水準の高い相関が算出されるところから、母親は子育ての語りの前でも後でも子育ての省察に関心を持ち、子育ての内省を続けている。また、尺度内相関はどの下位尺度も正の相関であることから、尺度内の内省的な項目について考えることが他の項目の内省を高めていくという結果が得られた。

注目すべき点の第1は、「子どもの特性」と「親としての在り方」で1回目は5%で比較的強い相関であったものが、2回目は、1%で強い相関になっている点で、子どもの長所、短所を考えることが、親の長所、短所を考えることにつながるという相互の関係が高まっている。第2は、「子育ての他者からの影響」と「子どもの言動への関心」の相関が1回目は強い相関が表れていないが2回目には5%の比較的強い相関になり、他の人の子どもへの対応から自分の子どもの言動に関心を持つようになるという関係が出てきたが確認できた。

逆に相関関係が弱まった点は、「親としての在り方」と「コミュニケーション場面での対応」、「他者の対応の観察」と「親としての在り方」の相関である。どちらも「親としての在り方」との関係であり、「親としての在り方」を考えることが、「コミュニケーション場面での対応」や「他者の対応の観察」によって縛られなくなったという結果が得られた。

## 2、子育てに関する省察と親子間の信頼

親子間の信頼に関する尺度は、「親の子どもに対する尺度」と「子どもから親への思い」、「子どもとの日常的な関係」の下位尺度に因子分析ができ、親子の相互関係と日ごろの関係が抽出された。平均得点の変化(t検定)は、有意差のあるものはなかった。親子の関係は、子育ての語りによって変わらないとの結果が見られた。

しかし、「子どもに対する思い」と「子どもとの日常的な関係」では1回目の

結果と2回目の結果が低下傾向にあり、子育ての語りにより慎重に母親が子どもをみつめる傾向が見られた。吉武(1995)は、親との会話を通したコミュニケーションの程度と、共感性の高さとの関連について、共感性の高い親が実際の日常生活の中でも、共感性を強化する相互作用を行っているとしている。子育ての語りは、母親にとっては、共感性の高い話題であったと思われるが、子どもにうまく伝わっているかという点や子どもが理解できたかなどの語りの場面での子どもの様子についての観察から子どもの見方を少し厳しく見ていこうとする気持ちがあると考えられる。子育ての語りは、親子関係の共感性を高めるものではなく大丈夫だろうかという思いを喚起させたのではないかと考える。奥石(2002)は、育児において対処不能感を感じ、育児行動におけるネガティブな認知的評価をした時、自己について考え込んでしまいやすい状況にあるとしている。このようにうまく伝わらないことで親は、自己や状況についてネガティブになりやすいことから、子育ての語りが、親はネガティブな傾向になり下降傾向になったと考えられる。

ネガティブな傾向は、親子間の信頼に関する尺度の尺度内相関にもみられ、「子どもの親に対する思い」と「子どもの親に対する思い」が1回目も2回目も1%水準の強い相関を示すのに対して「子どもとの日常的な関係」と「子どもの親の対する思い」、「子どもの親に対する思い」のそれぞれの関係では、強い相関関係が見られない。親子の信頼関係は、親子の同士の互いを思いやることでのみ強い相関関係があり、日ごろの親子関係に見られる共感的なことや、指示的であることなどは、親子の信頼関係に関して関わりが少ないと考える。子育ての語りの場面は、親子の話の受け止め方の善し悪しが作用して母親をネガティブな傾向にしているならば、語りの場面では、日常的な関係とは違う特別な場面が展開していると考えられる。

子育てに関する省察と親子間の信頼に関する尺度についての相関は、「親の子どもに対する思い」と「子どもの親に対する思い」の尺度と子育ての内省に関する下位尺度と相関関係にあるものはほとんどない。「子どもとの日常的な関係」と、「子どもの特性」、「子どもの受け止め方」において5%水準の比較的強い相関が見られた。ここでも親子の信頼関係は、子育ての内省とはあまり関係しない。日常的な関係でのみ相関関係が確認できている。その結果は、2回目もほとんど同じで、「子どもとの日常的な関係」と「子どもの受け止め方」でのみ比較的強い相関現れた。親子の信頼関係の語りによる内省の変化はほとんど見られず、親子の信頼関係に子育ての語りは影響しないことが分かる。

### 3、子育ての語りの効果と子育てに関する省察

語りの効果尺度は、子育ての語りの取り組み全体についての効果を探的に評価していくための尺度である。因子分析では、3つ因子が抽出された。各下位尺度は「語りによるエンパワーメント」、「語りの場面でのやり取り」「子育ての苦勞の語り」にわかれ、尺度内相関は、「語りの場面でのやり取り」と「語りによるエンパワーメント」では、1%水準の強い相関関係が見られ、「子育ての苦勞の語り」と「語りの場面でのやり取り」では、5%水準の比較的強い相関

がみられた。語りの場面でのやり取りがうまくできれば、親をエンパワーすることができることや、子育ての苦労をうまく話すことができれば、子どもはいろいろ質問したりして、興味をもつということが言える。

子育てに関する省察との相関は、子育ての語りの前の1回目では「子育ての苦労の語り」と子育てに関する省察の「子どもの受け止め方」、「子育ての他者からの影響」、「他者の対応の観察」でいずれも1%水準で高い相関があった。子育ての語りをする前の状態では、子育ての大変だった話は、子どもが聞いてどのように受け止めるのかを観察することや、他の人の子育ての様子や自分の子育ての気づきによって変化すると考えられる。語りの後の2回目では、「語りによるエンパワーメント」との関係で、子育てに関する省察の「コミュニケーション場面での対応」、「親としての在り方」、「子どもの特性」と間で1%水準の強い相関が見られた。子育ての語りの後は、子どもに対する言動に気をつけることや親として自分の長所、短所を考えること、子どもの長所、短所を考えることで、親としての自分がエンパワーしたという相関関係が見られる。子育ての語りは、他者を観たり、他者からの影響を受けることで決められていた。また、他者との比較で子育てを考えていた親が、自分や子どもに視点を置く事でエンパワーされたと考えられる。

## 第2節 子育てに対する自己評価と子育てに関する省察

### 1、子育てに対する自己評価と子育てに関する省察の変化

子育てに対して自己評価の低い群と高い群に分けて、子育ての語りにより変化をt検定でみると、低群では有意差の見られる子育てに関する省察の下位尺度はみられなかった。高群では、「コミュニケーション場面での対応」では、1%水準で有意差が見られ得点が上昇している、また「親としての在り方」でも、5%水準で有意差が見られ得点の上昇が認められた。

子育てに不安の少ない親の方が、不安がある親より「コミュニケーション場面での対応」「親としての在り方」で得点が上がった。これらの尺度は、どちらも親自身に関する省察の下位尺度であることからこの結果は、高群の親の内省は、活性化した結果となった。朴・杉村(2006)は、子育ての省察を行う親の子育てはうまくいっているという認識を確認していることから、子育てに対して不安が少ない親は子育てに対する自信をもち、自分の子育てについて内省を深めることができたと考える。

### 2、子育てに対する自己評価の高さによる相関の比較

子育ての自己評価の低群では、子育てに関する省察の尺度内の相関は、どの尺度でも1%水準で高い相関がみられ、その相関関係は1回目も2回目も高く、相関係数は僅かに上昇している。そして、子育ての語りによる大きな変化は子育てに関する尺度内では見られない。しかし、子育ての自己評価の高群では強い相関を示す尺度は少なく、「子どもの特性」、「子どもの受け止め方」「他者の対応の観察」との相関に集中している。また、その傾向は、子育ての語りの後でも同じである。

この結果から高群と低群の尺度内相関は明らかに違うことが確認された。低群の子育てに関する省察の相関は、低群のこれまでの子育ての自信をやや欠いていた母親は、わが子の子育てに関していろいろな関心や注意を払おうとしていると考える。それは、子育ての語りを終えた後も続き、母親の迷いや答をみつけよう、子育てを深く考えようとするため、多くの尺度内相関を高くしていると考えられる。高群は、子育てに自信があり何に対して注意や関心を払うことが、自分の子育てに必要なと考える力を最初から持っており、子育ての語り如何に関わらずポイントを心得ていて、子ども様子や他者との関係から自分の子育てを考えていると思われる。

ここで問題となることは、これまでt検定などの結果から子育てに関する省察の得点の高低が省察をしている、またはしていないということを示しているのだろうかということである。単に尺度得点の高さが省察の深まりや広がりを示しているのではないと考えられる。子育ての語りの効果などの相関に注意を払いながら尺度得点や相関を見ていく必要がある。

### 3、子育ての語りの効果と子育てに関する省察

子育ての語りの効果の下位尺度「語りによるエンパワーメント」では、低群の親の反応が高群にくらべて大きい。低群の1回目では、他者やこれまでの子どもに対する信頼感に向いていた関心が、2回目では母親自身の子育て場面での子どもに対する語りかけや、子どもそれぞれが持つ特性に目を向けようとしている。「子育ての苦勞の語り」においても傾向は同じようで、ここでも、低群の親は、他者に対する関心から自分自身や子どものことに関心が向かっている傾向が見られる。高群にはそうした状況は見られず、「子育ての苦勞の語り」との相関で、1回目「子どもの受け止め方」と「子育ての他者からの影響」に高い相関が見られたが、2回目は「子どもとの日常的な関係」に強い相関がうつつている。高群の子育ての語りによる変化は、語る前は省察の下位尺度に関心が向いていたが、子育ての語りを終えると内省よりも子どもとの関係に関心が移ったのではないかと考える。

鹿子木・森口(2009)によって、内省能力の発達を検証した探索的研究によると、子どもは、自分に対する他者の考え(二次的信念)を理解することによって、自身の心的状態に対する洞察が促されるとしている。低群の親の内省の動きと類似する点があるのではないかと考える。低群の親の内省は、他者から影響を意識していたところから、自分自身の方向に関心が移る点では、発達の途中に子どもの内省能力の発達と似ている。低群の親は、内省得点は低いが、子どもと自分をとりまく条件の中から、子育てに対して肯定的になれる答えがどこにあるのか探索的にみているのではないだろうか。

こうした疑問に答えるために、重回帰分析によって変数間の因果関係を明らかにしようとした。高群では、語りの前に「子育ての他者からの影響」への省察が、「子育ての苦勞の語り」に影響を与えていることが明らかになった。高群の親にとっては、子育ての語りをするのが子育ての苦勞を振り返ることであり、それは他者からの子育てに関する影響によって規定されていることであ

ることが判明した。このように高群では、振り返り以外の効果は見られないという結果を得た。しかし、低群では、語りの前に「子育ての他者からの影響」が、「語りによるエンパワーメント」と「子育ての苦勞の語り」に影響を与え、語りの後では「コミュニケーション場面での対応」が、「語りによるエンパワーメント」と「子育ての苦勞の語り」に影響を与えている結果を得た。これまでの子育てに自信を持てていなかった低群の親は、子育ての語りによって、他者と比較することによる内省から、自分の対場面的な在り方に対する内省に関心を向けるようになったことが明らかにされた。

### 第3節 総合的な考察と問題点

#### 1、総合的な考察

子育ての語りは、親の内省をどのように変化させるのかという問題について研究を進めてきた。小学2年生の我が子に、これまでの子育ての様子、子どもがどのように大きくなってきたか知らせることは、それぞれの親にとって個々の子育て、個々の考えの上に立つ百人百様の語りが存在する。しかし、親としての立場で子どもに伝える行為は、一様で、その内省は、一定の傾向が存在するという考えのもとに研究を行った。

親、子、他者の3つの対象に対して、1次的、2次的、3次的省察という朴・杉村(2006)のモデルは、因子分析の段階で親と他者に関して2因子に因子分析を行ったために、確認することはできなかったが、省察に階層があり、対場面的な階層と内省的な階層を意識して省察の動きをみることができた。また、省察に関して因子の得点の変化によって内省の変化を見ていくこともできた。

子育てに関する省察は、同じ尺度内では相関が高く、語りの前でも語りの後でも大きく変わらないことや、得点の平均の増加から、母親の内省的な深まる傾向を観測することができた。

そして、親自身に関する省察、他者を通じた省察での得点の増加によって子育ての語りによる内省の変化が起きている結果を得た。相関係数からは、具体的には、子どもの長所、短所を考えることが、親の長所、短所を考えることにつながるという相互の関係が高まっている点や他の人の子どもへの対応から自分の子どもの言動に関心を持つようになるという語りによる相互の関係の変化が見られた。

また、親子間の信頼関係と子育てに関する省察では、相関関係が低く、子育ての語りによる影響も少ない結果となった。子育てに関する省察は、親子間の信頼関係に左右されることなく行われることが確認された。

子育ての自己評価の低群と、自己評価の高群の子育てに関する省察と語りの効果では、語りの前と後の平均得点では、高群の親自身に関する省察の因子得点に有意差が見られたが、低群には有意差のある尺度はなかった。しかし、相関係数を求めたところ、高群に比べ低群に多くの高い相関が見られた。語りによる相関係数の変化は、低群が高い相関関係がある結果となった。これらのことから、これまでの子育ての自己評価の高低による内省の違いがあることが確

認された。そして子育ての語りの効果についても相関係数から高群、低群の違いが確認された。

輿石(2002)は、育児において対処不能感を感じ、育児行動におけるネガティブな認知的評価をした時、「私のどこが悪いのだろう」「私はどう努力すればよいのだろう」などと自己について考え込んでしまいやすい状況になるとしており、低群の母親にとってこれまでの子育ての不安があったところに、子育ての語り場面でも満足が得られない経験をし、子育てに対する不安について考えることが持続している状態になったと考える。宮内(1998)は、保育の場面の省察過程で、子どもの行為の意味をとらえることは、自分自身の保育を見つめること=実践を問い直すことであり、自分自身の保育の在り方に関連性をもたせ新たな課題を見つけることであるとしている。母親が子育ての語りの場面で、語りを聞いている子どもの様子を捉えることが、自分自身の子育てを見つめ、問い直し、子育ての在り方に新たな課題を見つけようとしていると考えたと、子育ての語りは、子育ての自己評価の低群の親にとってまさに省察過程の中にあると考えられる。高群の母親は、1回目の省察を行うことで自己内省を高め、子育ての変化させるべき部分に気が付き、語りは単なる自分の子育ての有効性についての確認に過ぎず、語りの後は省察への関心はなくなったと考えられる。結果として、子育ての語りは低群の母親の内省を刺激し、子育てをエンパワーしたり、苦勞した子育ての場面を振り返る機会となっていた。

こうした傾向は感想からも読み取ることができる。高群の母親の感想には、子育てを振り返るといよりは、語りの場面での出来事や、これからのことに対して前向きな表現が多い。しかし、低群の母親は、これまでの子育てを振り返るよい機会とする記述や、振り返ることで自分なりに子育てを見直していこうとする傾向があると考えられる。

今回の研究から、子育てに関する省察は、尺度得点で判断できる表面的に見える部分と、得点の高さに現れないが奥に流れている隠れた内省があることが示唆された。そうして、親が子どもとの一瞬一瞬の中から子どもの様子を観察し、自分の有効性や親としての在り方意識しながら接するところから、反省や思いなおしをし、子育てに前向きになっていく過程があることを確認することができた。

## 2、問題点とこれから

このように子育てに関する省察を、認知的に捉えるにはより多くの視点が必要である。また、親の子育ての省察過程は、親の状況によって解釈に変化が必要となる。今後より多くの基本的な条件を整えた基礎となる研究が必要であると考えられる。

今回、低群の親にとって子育ての語りは内省を高め、親をエンパワーする働きを確認できたが、母親の内省が十分でポジティブになれているかという点はまだ足りてはいない。こうした段階で適切な子育て支援を行うことが、新しい子育てに対する考え方に近づくためには必要である。支援に必要なことは、よいコミュニケーションの在り方であったり、子どもの発達や親の子どもへの対応の

在り方であったりする。こうした、プラスアルファを行うことで内省を高め、方向を見いだすことができるであろうと考える。

### (参考文献)

- 朴信永・杉村信一郎 (2009): 幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討. 発達心理学研究, 20 (2), 99-111
- 朴信永・杉村信一郎 (2006): 子育て研究の動向と展望. 幼年教育研究年報, 28 (2), 99-107
- 長谷範子 (2009): 母親に対する育児支援—子育て支援事業における母親アンケートから—. 日本教育心理学会総会発表文集, 49, 311
- 橋本景子 (2009): 子どもの育ちと母親の育児姿勢 (2) —子育て中の母親の意識調査から—. 高田短期大学期要, 27, 13-22
- 藤井加那子・永井利三郎 (2008): 育児期にある母親の育児満足感に影響する因子—子育て不安の認識の有無による違い—. 小児保健研究, 67, 1, 10-17
- 石橋淳祐・堂野佐俊 (2006): 母親が抱く期待が小学生に与える影響—家族機能と児童の自己効力感との関連から—. 山口大学臨床心理研究, 6, 3-11
- 鹿子木・森口・板倉 (2009): 内省能力と二次的信念の理解との発達の関連. 発達心理学研究, 20, 24
- 神田直子・山本理絵 (2007): 「幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ」愛知県立大学文学部論集 (児童教育学科編), 56, 17-34
- 柏木恵子・若松素子 (1994): 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5 (1), 72-83
- 川井尚・安藤朗子・武島春乃他 (2006): 父親の役割に関する基礎的研究—母親の役割とも比較して—. 42, 177-190
- 興石 薫 (2002): 母親の自己注目傾向と育児不安について. 小児保健研究, 61, 3, 475-481
- 眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・川島亜紀子 (2008): SSICS による親子コミュニケーションの分析と子どもの自己知覚との関連. 教心第50回総会
- 宮内佳緒里 (1998): 省察過程における保育者の意識について. 日本保育学会第50回大会発表論文集, 604-605
- 文部科学省 (2008): 「小学校学習指導要領解説生活編」日本文教出版, 1-18
- 森美保子・福島脩美 (2007): 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向. 目白大学心理学研究, 3, 147-167
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (2006): 「心理学辞典」, 有斐閣
- 及川裕子 (2005): 親性の発達に関する研究—乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討. 埼玉大学紀要, 7, 1-7
- 大日向雅美・荘厳舜哉 (2005): 「実践・子育て学講座3 子育ての環境学」大修館書店.
- 大河原美以 (2004): 親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響—よい子がぎれる現象に関する試論—. カウンセリング研究, 37, 2, 180-190
- 佐藤淳 (2005): 「新版 たのしいせいかつ 下・大すぎ 教師用指導所 指導編」大日本出版 153-173
- 佐藤朗子 (2004): 特定場面における親子のコミュニケーション行動と心理的絆—平井・岡本論文へのコメント—. 青年心理学研究, 16, 73-79
- Shon, D.A (2001): 専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える (佐藤学・秋田喜代美訳). 東京: ゆみる出版 (Shon, D.A. (1983). *Reflective practioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.)

武井祐子・寺崎正治・門田昌子 (2006): 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響. 川崎医療福祉学会. 16 (2) . 221-227

武井祐子・寺崎正治・高尾堅司・門田昌子 (2008): 養育者との面接から捉えた育児不安についての質的研究. 川崎医療福祉学会. 18 (1) . 219-225

八木成和・萩原唱子・境千恵 (1993): 母親の子どもへの生きがい感と自己効力感. 日本教育心理学会総会論文集. 35. 414

吉村香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美 (1997): 保育者の成長における実践と省察. 保育学研究. 35 (2) . 288-296

吉武久美子 (1995): 親子コミュニケーションによる幼児の共感生の発達ー幼児の共感性と同調が向社会的行動の出現に与える影響ー. 純心人文研究. 創刊. 135-144

#### (参考ウェブページ)

的場康子 (2009): 子育てしやすい地域社会の構築のためにー地域社会の教育向上に向けた取り組み中心にー 第一生命経済研究所 LifeDesign REPORT Sumer 2009.7 [http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi\\_note.cgi](http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi_note.cgi)

内閣府, 「少子化対策」関係法令 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/01about/about.html>

#### 謝辞

本論文の執筆にあたり、快くデータの収集にご協力いただいた、小学校の先生方、児童の皆さんと保護者の皆様に心からお礼申し上げます。また、丁寧にご指導くださいました谷向みつえ先生に心からお礼申し上げます。

# 資料

## 子育てアンケートのお願い

お子さんが生まれてから今日まで、多くの出来事にぶつかりながら、悩みながら子育てを続けてこられたことと思います。そうした、日々のひとつひとつの気遣いが、子ども達の豊かな育ちに結びついているのだと思います。

今回は、そうした子育てを振り返っていただき、日ごろ気にしていることについてアンケートにお答えいただきたいと思います。また、お子さんとの関わりやコミュニケーションの様子についても伺い、コミュニケーションのありかたを考えるとともに、これからの児童期の子育て支援のありかたをより良いものにしていきたいと考えております。

どの質問も正解やよい答えはありません。皆様が感じておられるその通りにお答え下さい。結果は、コンピューターで統計的に処理されます。また、結果は学術的な目的以外には使用いたしません。ご多忙のところ大変申し訳ありませんが、これまでのこと現在のことについて感じたとおりにお答え下さい。ご協力よろしくお願いします。

関西福祉科学大学 大学院 社会福祉学研究科

心理臨床専攻修士課程 阿古 暁子

おねがい

- ・ 記入もれがないように、最後に確認をお願いします。
- ・ 記入後はアンケートを封筒に入れ封をして、学校に提出してください。
- ・ 複数のお子さんがいらっしゃる場合は、2年生のお子さんについてお答え下さい。

\*できるだけ12月21日までに提出をお願いします。

# 子育てアンケート 1

子育てを振り返っていただき、日ごろ気にしていることについてアンケートにお答えいただきたいと思います  
お忙しいことと思いますが、何卒よろしくお願いします。

阿古 暁子

・ 記入日 :            月            日

・ あなたの年齢

20歳代 ・ 30歳代 ・ 40歳代 ・ 50歳代

・ お子さんの人数

ひとり ・ 2人 ・ 3人 ・ 4人 ・ 4人以上

・ 2年生のお子さんとの関係

長男 ・ 長女 ・ 二男 ・ 二女 ・ 三男 ・ 三女 ・ 四男 ・ 四女 ・ その他(     )

・ お仕事の様子

専業主婦 ・ パートやアルバイトをしている ・ フルタイムで仕事をしている

・ 家族数

2人 ・ 3人 ・ 4人 ・ 5人 ・ 6人 ・ 7人 ・ 8人 ・ 9人 ・ それ以上(     )人

・ 父母との関係

同居 ・ 別居

1、あなたは、お子さんとどんな話をよくされますか。よくする内容に○印をつけてください。(3つまで)

学校のこと・友だちのこと・勉強のこと・宿題のこと・家族のこと・習い事のこと・小さい時のこと  
テレビやゲームのこと・遊びのこと・お父さんやお母さんの仕事のこと・近所のこと・ペットのこと  
休日の予定や楽しみなこと・その他か( )

2、学校のある日は、お子さんとどの時間帯によく話しますか。

朝起きて学校に行くまで・朝ごはんの時・学校からかえってすぐ・夕方ごはんを食べるまで・夕ごはんの時  
夕ごはんの後寝る前・その他か( )

3、学校のある日なら、お子さんと話す時間は、どれぐらいの時間ですか。

5分ぐらい・15分ぐらい・30分ぐらい・45分ぐらい・1時間ぐらい・1時間15分ぐらい  
1時間半ぐらい・2時間ぐらい・2時間以上・ほとんどない

4、あなたは、人と話すことは好きですか。

好き・どちらでもない・嫌い

5、あなたは、人の話を聞くことは好きですか。

好き・どちらでもない・嫌い



9	子どもにとって、将来何が必要か考えながら育てている	1	2	3	4	5
10	子どもと話した後、子どもがどのように受け止めたか考えることがある	1	2	3	4	5
11	子どものこれからの成長について考えることがある	1	2	3	4	5

・他人の子どもと親を見て、自分が感じていることについてお答え下さい。

	まれに	たまに	ときどき	よく	いつも
1	1	2	3	4	5
2	1	2	3	4	5
3	1	2	3	4	5
4	1	2	3	4	5
5	1	2	3	4	5
6	1	2	3	4	5
7	1	2	3	4	5
8	1	2	3	4	5
9	1	2	3	4	5
10	1	2	3	4	5
11	1	2	3	4	5

・あなたとお子さん（2年生）についておうかがいします。あてはまるところに○印をつけてください。

	あてはま らない	あ ま り あ て は ま ら ない	あ ま り あ て は ま る	あ て は ま る
1	1	2	3	4
2	1	2	3	4

3	この子は、私といっしょにいて幸せだと思う	1	2	3	4
4	この子が何を考えているのか、どうしたいのかはだれよりも私が分かっている と思う	1	2	3	4
5	この子のことは、信頼できる	1	2	3	4
6	私は、この子といて幸せだ	1	2	3	4
7	私は、この子のことがだいすきだ	1	2	3	4
8	この子は、私の気持ちがよくわかると思う	1	2	3	4
9	この子に、私はよく注意する	1	2	3	4
10	この子に、私はよくお手伝いを頼む	1	2	3	4
11	私は、この子とよく相談する	1	2	3	4
12	私は、この子と話していると楽しい	1	2	3	4

・ご協力ありがとうございました。調査に関するご意見やご感想、または、何か子育てでお悩みのことがありましたら、お書き下さい。

\* 悩み事については相談を受けさせていただきますので、よろしければ連絡先をお知らせ下さい。(

)

## 子育てアンケートのお願い 2

1回目の「子育てアンケート」へのご協力ありがとうございました。貴重な資料として現在、研究に生かさせていただいております。

今回は、「お子さんが育ってきた様子」について、お子さんに語り終えた今の感想を伺うアンケートをお願いしたいと思います。内容は、前回とほとんど変わりませんが、語ってきた後のご自分のお考えや感想についてお答え下さい。

どの質問も正解やよい答えはありません。皆様が感じておられるその通りにお答え下さい。結果は、コンピューターで統計的に処理されます。また、結果は学術的な目的以外には使用いたしません。ご多忙のところ大変申し訳ありませんが、今までの子育てについて語り終えて感じておられることを率直にお答え下さい。ご協力よろしく申し上げます。

関西福祉科学大学 大学院 社会福祉学研究科

心理臨床専攻修士課程

阿古 暁子

### おねがい

- ・ 記入もれがないように、最後に確認をお願いします。
- ・ 記入後はアンケートを封筒に入れ封をして、学校に提出してください。
- ・ 複数のお子さんがいらっしゃる場合は、2年生のお子さんについてお答え下さい。

\*できるだけ3月15日までに提出をお願いします。

# 子育てアンケート 2

「お子さんが育ってきた様子」をお子さんにお話になったあのお考えや感想について伺います。  
お忙しいことと思いますが、何卒よろしくお願いします。

阿古 暁子

- ・これまでの「お子さんが育ってきた様子」を語り終えて、2年生のお子さんの子育てについて、あなたは、どのように感じておられますか。当てはまるものに○印をつけてください。

	まれに	たまに	ときどき	よく	いつも
1 子どもに対する自分の言動に気をつけることがある	1	2	3	4	5
2 子どもに何か伝える前に、自分の伝え方について考えることがある	1	2	3	4	5
3 親としての信念について考えることがある	1	2	3	4	5
4 親としての自分の長所・短所を考えることがある	1	2	3	4	5
5 子どもに何か言う前に、自分の言動の影響を考えることがある	1	2	3	4	5
6 子どもが何か言った後、そのときの自分の感情について考えることがある	1	2	3	4	5
7 「子どもを育てる」ことはどういうことか考えることがある	1	2	3	4	5
8 子どもと話すとき、自分の言動や態度を意識することがある	1	2	3	4	5
9 子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	1	2	3	4	5
10 自分の子育ての方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	1	2	3	4	5

- ・「お子さんが育ってきた様子」を語り終えて、2年生のお子さんについて、今あなたが今感じておられることについてお答えください。

	まれに	たまに	ときどき	よく	いつも
1 子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向けることがある	1	2	3	4	5
2 子どもと話す前に、子どもの受け止め方について考えることがある	1	2	3	4	5
3 子育ての出来事から「子ども」の本質について考えることがある	1	2	3	4	5
4 子どもの言動に気をつけている	1	2	3	4	5
5 子どもに関する長期的見通しについて考えることがある	1	2	3	4	5

6	子どもがどう変わってきたか考えることがある	1	2	3	4	5
7	子どもと話しているとき、子どもの表情や態度に注意することがある	1	2	3	4	5
8	子どものふだんの行動から、子どもの長所・短所を考えることがある	1	2	3	4	5
9	子どもにとって、将来何が必要か考えながら育てている	1	2	3	4	5
10	子どもと話した後、子どもがどのように受け止めたか考えることがある	1	2	3	4	5
11	子どものこれからの成長について考えることがある	1	2	3	4	5

・「お子さんが育ってきた様子」を語り終えたあなたが、他人の子どもと親を見たとき、今感じることについてお答え下さい。

		まれに	たまに	ときどき	よく	いつも
1	他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることもある	1	2	3	4	5
2	他人と子どもの話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	1	2	3	4	5
3	他人の子どもの言動を注意深く見ることもある	1	2	3	4	5
4	他の人と話しているうちに、子育てに関する疑問が解決することがある	1	2	3	4	5
5	他の親の子どもに対する話し方に注意することがある	1	2	3	4	5
6	他の子どもが親と話す様子に注意を向けることがある	1	2	3	4	5
7	他の人と子育ての話をして、自分の子育ての方針を改めることがある	1	2	3	4	5
8	他の人の育て方を見て、今の自分の子育てに必要なことに気づくことがある	1	2	3	4	5
9	他の子ども達と話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	1	2	3	4	5
10	いろいろな話を聞いて、自分の子ども親を見直すことがある	1	2	3	4	5
11	他の子どもが親とかかわる様子を注意深く見ることもある	1	2	3	4	5

・「お子さんが育ってきた様子」を語り終えたあなたとお子さんについて、当てはまるものに

○をつけてください。

	あてはまる たぶん	あてはまる たぶん	あてはまる たぶん	あてはまる
1 この子は、だれよりも私のことが好きだと思う	1	2	3	4
2 この子は、だれよりも私のことを信頼していると思う	1	2	3	4
3 この子は、私といっしょにいて幸せだと思う	1	2	3	4
4 この子が何を考えているのか、どうしたいのかはだれよりも私が分かっている と思う	1	2	3	4
5 この子のことは、信頼できる	1	2	3	4
6 私は、この子といて幸せだ	1	2	3	4
7 私は、この子のことがだいすきだ	1	2	3	4
8 この子は、私の気持ちがよくわかると思う	1	2	3	4
9 この子に、私はよく注意する	1	2	3	4
10 この子に、私はよくお手伝いを頼む	1	2	3	4
11 私は、この子とよく相談する	1	2	3	4
12 私は、この子と話していると楽しい	1	2	3	4

1、 「お子さんが育ってきた様子」を「お子さんに、いつどのような状態で話されることが多かったですか。

1番多かったものに○印をつけてください。

- ① 平日
- ② 土曜日
- ③ 日曜日
- ④ 休日

に

- ①何か用事をしながら
- ②テレビなど見ながら
- ③くつろぎながら
- ④集中して

話した。

2、 お子さんに話された時間は、1回にどれぐらいの時間ですか。○をつけてください。

- ⑤ 5分ぐらい
- ② 15分ぐらい
- ③ 30分ぐらい
- ④ 45分ぐらい
- ⑤ 1時間ぐらい
- ⑥ 1時間以上
- ⑦ ほとんどない

3、 どなたがお子さんに、「育ってきた様子」を話しましたか。よく話されていた人を選んで○を付けてください。

- ① お母さんが
- ② お父さんが
- ③ お父さんとお母さんが
- ④ お母さんと兄が
- ⑤ 母親と祖父・祖母が
- ⑥ 家族そろって
- ⑦ その他( )

4、 話す前にどんな準備をされましたか。やったこと全部に○をつけてください。

- ① 小さい頃の写真を見た
- ② 育児日記を見た
- ③ 保育園、幼稚園などの連絡帳を見た
- ④ 子どもの作品を見た
- ⑥ 家族と話して思い出した
- ⑥ 母子手帳を見た
- ⑦ 祖父母にたずねた
- ⑧ ビデオを見た
- ⑨ アルバムを見た
- ⑦ ⑩特に何もしない
- ⑪その他( )

5、「お子さんが育ってきた様子」を語る時のことについて伺います。

	いいえ	少しいいえ	少しはい	はい
1、語る前に、これまでの子育てはうまくいっていると思っていましたか	1	2	3	4
2、語る前に、これまで子育てをがんばってきたことに自信を持っていましたか	1	2	3	4
3、大きくなってきた様子を十分語ることはできましたか	1	2	3	4
4、改めて子どもの成長を実感できましたか	1	2	3	4
5、子育ての中の楽しい思い出は、語れましたか	1	2	3	4
6、子育て中の忙しかった思い出は、語れましたか	1	2	3	4
7、子育てに協力してもらった人のことは思い出しましたか	1	2	3	4
8、子育ての相談をした経験を思い出しましたか	1	2	3	4
9、お子さんは、話を聞いて、自分が大切に育てられていることを感じ取ったと思いますか	1	2	3	4
10、お子さんは、話を聞くことで自分に自信が持てたと思いますか	1	2	3	4
11、お子さんとの関係は、深まったと思いますか	1	2	3	4
12、語ることで、これまでの子育てに改めて自信が持てましたか	1	2	3	4
13、語ることで、子育てをこれからも頑張っていこうと言う気持ちが、わいてきましたか	1	2	3	4
14、語ることで、今までの子育てに対して新しい見方ができましたか	1	2	3	4
15、お子さんは興味を持って話を聞きましたか	1	2	3	4
16、お子さんは話を聞いている時いろいろ質問しましたか	1	2	3	4
17、お子さんは話を聞いた後で質問しましたか	1	2	3	4
18、お子さんに話した内容は、うまく伝わったと思いますか	1	2	3	4
19、お子さんにわかりやすく話す工夫をしましたか	1	2	3	4
20、お子さんの話を聞いている様子は気になりましたか	1	2	3	4
21、お子さんのメモを取る様子を気にかけてながら話しましたか	1	2	3	4
22、お子さんに、話を聞いた後の感想を聞きましたか	1	2	3	4

6、「お子さんが育ってきた様子」を話す家庭学習について、どのように思っておられますか。

	いいえ	少しいえ	少しはい	はい
1、語っている時間は、有意義に感じましたか	1	2	3	4
2、語り終えて満足感がありましたか	1	2	3	4

2 回ものアンケートへのご協力 ありがとうございました。

今回のアンケートやお子さんに育ってきた様子を話したことに対する感想がありましたらお書きください。